

| 番組名                     | 放送日                          | 概要   | 曲目、出演者等   |
|-------------------------|------------------------------|--|---|
| <b>オペラ</b>              |                              |  |   |
| ウィーン国立歌劇場2016『ドン・バスカーレ』 | 20,20,2<br>5,25,31,<br>0,0,0 | 現代最高のベルカント・テノールと世界最高のベルカント・バスの夢の共演が実現した傑作オペラ・プッファ。巨匠の娘イリーナ・ブルックの演出も冴える！        | <p>「現代最高のベルカント・テノール」の呼び声も高いファン・ディエゴ・フロレスは1973年ベルのリマ生まれ。1996年にベアザロのロッシーニ・オペラ・フェスティヴァルでデビューするや、その繊細で美しい高音と巧みな装飾技術、そしてそれが作り物に聴こえない自然な歌唱で、たちまち世界の歌劇場を席巻したテノール歌手です。そのフロレスが喜劇の二枚目役を演じたのが、オペラ・プッファ（喜劇オペラ）の最高傑作のひとつである、ガエターノ・ドニゼッティの歌劇『ドン・バスカーレ』。ウィーン国立歌劇場の、2015年4月に新制作された、まだ新しいプロダクションです。現代風ですがどこかアメリカン・レトロな、映画『ゴッドファーザー』にも出てきそうな舞台の演出を手がけたのはイリーナ・ブルック。現代演劇の巨匠ビーター・ブルックを父に持つ気鋭の女性演出家です。</p> <p>バスカーレは資産家の独身老人。家族のいない彼は、甥のエルネストに、金持ちの娘と結婚するのなら自分の財産を譲ろうと申し出ますが、若く美しい未亡人リリーナと愛し合っているエルネストはそれを拒否します。バスカーレはそれならば自分が結婚して子供を作り、その子に財産を相続させると宣言し、友人のマラテスタに花嫁探しを依頼しているところ。ところがマラテスタはエルネストの友人でもあり、若い二人の恋愛を成就させようとバスカーレを騙す計画を練っているのです。偽の花嫁を紹介して悪妻を演じさせ、結婚生活に懲りたバスカーレに、エルネストの結婚と財産相続を認めさせようという企み。そして偽の花嫁に選んだのは、なんとリリーナその人でした。哀れにもまんまと騙されたバスカーレでしたが、最後は寛大な心で皆を許します。リリーナが歌う「その騎士は熱い眼差しに」や、エルネストの「甘く清らかな夢よ」「見知らぬ遠い土地で」などの甘い旋律の Aria、そしてオペラ・プッファの真骨頂とも言える、二人のバス歌手バスカーレとマラテスタによる早口の二重唱「そとそと、ますますに」など、チャーミングな音楽がいっぱいです。</p> <p>エルネスト役には聴かせどころ満載で、フロレスの魅力を思う存分堪能できる作品です（第3幕の「セレナーデ」では客席の拍手が鳴り止みません）。一方でオペラ・プッファに欠かせないのが「パッソ・プッフォ」（道化バス）。題名役を演じているのはミケーレ・ベルトゥージです。フロレスが「現代最高のベルカント・テノール」なら、ベルトゥージは「世界最高峰のベルカント・バス」。深く高貴な歌声と、抜群の演技力で客席を沸かせます。リリーナ役は売り出し中のモルドバ出身のソプラノ、ヴァレンティーナ・ナフォルニータ。2011年のBBCカード・国際音楽コンクール優勝者が、コケティッシュな魅力を振りまいています。</p> <p>[出演] ミケーレ・ベルトゥージ（ドン・バスカーレ／バス） ファン・ディエゴ・フロレス（エルネスト／テノール） ヴァレンティーナ・ナフォルニータ（リリーナ／ソプラノ） アダム・ブラチェツカ（マラテスタ／バス・バリトン） ヴォルフラム・イーゴル・デルントル（公証人／テノール） [演目]ガエターノ・ドニゼッティ：3幕のドラマ・プッフォ『ドン・バスカーレ』[台本]ジョヴァンニ・ルッフィニ&amp;ガエターノ・ドニゼッティ[演出]イリーナ・ブルック[衣裳]シルヴィ・マルタン＝ヒシュカ[照明]アルノー・ユング[振付]マルティン・ブチエコ[指揮]エヴェリーノ・ビド [演奏] ウィーン国立歌劇場管弦楽団及び同合唱団、同舞台オーケストラ、ゲルハルト・ベルンドル（トランペット独奏） [合唱指揮]マルティン・シェバスタ[収録]2016年4月21日ウィーン国立歌劇場[映像監督]エッラ・ガッリエーニ<br/>■字幕/全3幕：約2時間12分</p> |
| メサジェ『可愛いミシュ』            | 2,2,4,4,<br>21,21,2<br>9,29  | オペレッタの再評価が進むフランスで蘇った、小粋な名作。ミシュ家の可愛い二人娘の出生の秘密をめぐって、個性豊かな登場人物たちが繰り広げる愛と笑いに満ちた物語。 | <p>アンドレ・メサジェ（1853-1929）は、9歳年下のクロード・ドビュッシーから尊敬されていたフランスの作曲家。多くの軽快なオペラやオペレッタの他、宗教曲なども残しており、ドビュッシーの大作（ペレアスとメリザンド）の初演を振るなど指揮者としても活躍しました。</p> <p>メサジェ作曲の『可愛いミシュ』は、1897年にパリのプッパ・バリジャン座で初演されたフランス語オペレッタ。挿入歌が流行し、すぐさま国内外で再演が相次ぐなど大当たりを取り、1907年にはニューヨークのブロードウェイでも取り上げられました。しかし、ドビュッシーやガブリエル・フォーレやカミーユ・サン＝サーンスらが絶賛したこの作品は、やがてメサジェの名と共に音楽史の流れに埋没することになります。</p> <p>番組は、近年オペレッタ作品の再評価および蘇演の気運が高まっているフランスにて、2018年に初演された新演出。ポップなイラストレーションを活用した舞台美術とカラフルで鮮やかな衣裳が、遊び心あふれる演出に、いかにもフランスらしい小粋さと華を添えています。</p> <p>[出演]喜歌劇団「レ・ブリガン」：アンヌ＝オロール・コシェ（ブランシュ＝マリー／ソプラノ） ヴィオレット・ポリシ（マリー＝ブランシュ／メゾ・ソプラノ） フィリップ・エステフ（ガストン大尉／バリトン） マリー＝ルノルマン（マダム・ミシュ／メゾ・ソプラノ） ダミアン・ゼグルダン（ムッシュ＝ミシュ／テノール） ポリス・グラッパ（レ・ジフ侯爵・将軍／バリトン） アルタヴァスト・サルキヤン（店員アリストイド／テノール） ロマン・タイエ（伝令兵バニョレ／バリトン） カロリーヌ・マンガ（教師マドモアゼル・エルバン／メゾ・ソプラノ）</p> <p>[演目]アンドレ・メサジェ：オペレッタ『可愛いミシュ』[台本]アルベール・ヴァンロー、ジョルジュ・デュヴァル[演出]レミ・バルシエ[装置]サルマ・ボルド[衣裳]オリア・ステーンキスト[照明]フロラン・ジャコブ[イラストレーション]マリアヌ・トリコー[映像]ステファン・ボルドナロ[指揮]ビエール・デュムソー[演奏]ロワール地方国立管弦楽団&amp;アンジェ・ナント・オペラ合唱団[合唱指揮]アレリック・ジュネ[収録]2018年5月23日・24日グララン劇場（フランス、ナント） [映像監督]ニコラ・アンジェリ ■字幕/全3幕：2時間17分</p>  |

| 番組名                              | 放送日                         | 概要   | 曲目、出演者等  |
|----------------------------------|-----------------------------|--|--|
| ザルツブルク音楽祭2003『皇帝ティートの慈悲』         | 2,2,4,4,<br>7,10,10,<br>15  | 2003年ザルツブルクで実現した奇跡！ 巨匠アーノンクールがドリーム・キャストを結集。モーツァルト最後のオペラの人間ドラマに新たな光を当てた決定版上演。 | <p>「天才モーツァルトの名に値する価値のない作品」と揶揄されがちだったのはいまや昔の話。モーツァルト最後のオペラ『皇帝ティートの慈悲』は、その音楽の素晴らしさゆえ、またオペラ・セリアの改革を進めた重要作としても、その人気が定着しつつあります。2003年のザルツブルク音楽祭、ニコラウス・アーノンクール指揮、豪華なオールスター・キャストの歌手陣による上演の模様をお楽しみください。</p> <p>番組でお届けするのは、ザルツブルク音楽祭らしい夢のような顔ぶれの歌手陣が、アーノンクールのもとに集結した上演。全員がその力を遺憾なく発揮して、類まれな充実した舞台を楽しみることができます。まずは女声陣。物語の軸となるヴィッテリア役のドロテア・レッシュマンとセスト役のヴェッセリーナ・カサロヴァが圧巻です。歌が巧みなのはもちろんのこと、画面に大写しになる細かな表情やしぐさまですべてが演劇的な表現につながる、パーフェクトな演技を見せています。そしてセストの妹でティートに求婚されるセルヴィリア役のバーバラ・ボニーと、その恋人アンニオ役のエリーナ・ガランチャも十全のできばえで、この4人がオペラの骨格をがっしりと支えています。そして題名役のミハエル・シャーデのリカルなテノールもじつに能弁。ややもすると女声陣の存在感に押しされて貧弱に見えてしまふ役柄に、新たな光を当てたとさえ言える名演です。</p> <p>演出のマルティン・クシェイはミュンヘンの新レジデント劇場の芸術監督を務めるスロヴェニア系ドイツ人。ドイツのニュース雑誌『フォーカス』は彼を、「21世紀のドイツ語圏の劇場の最も重要な芸術監督10人」に選出しています。クシェイはオペラの舞台を現代に読み替えました。ティートが君臨するのはローマ帝国ではなく、どこかの自治体なのか組織なのか、もともと小さなコミュニティです。それは、反比例的に人間の内面ドラマをクローズアップすることにもつながっています。しかし決して奇をてらった独善的な手法ではなく、フォルゼンライトシュレの多層アーチの背景を巧みに生かした演出は、一瞬たりともモーツァルトの音楽を阻害していません。そしてそのことで、モーツァルトの音楽自体に封じ込まれていた人間の濃厚な心理的葛藤を、初演から200年以上たった現代に、ようやく明らかにしたのです。決定版の上演。どうぞお見逃しなく。</p> <p>【出演】<br/>ミハエル・シャーデ（ティート／テノール）ドロテア・レッシュマン（ヴィッテリア／ソプラノ）バーバラ・ボニー（セルヴィリア／ソプラノ）ヴェッセリーナ・カサロヴァ（セスト／メゾ・ソプラノ）エリーナ・ガランチャ（アンニオ／メゾ・ソプラノ）ルカ・ピサローニ（アプリオ／バス）</p> <p>【指揮】ニコラウス・アーノンクール【演奏】ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団【合唱】ウィーン国立歌劇場合唱団（合唱指揮＝ルベルト・フーパー）【演目】ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト：歌劇『皇帝ティートの慈悲』【演出】マルティン・クシェイ</p> <p>【舞台】ヘルムート・シャウアー【照明】ノルベルト・ピラー【衣裳・メイク】ドロテア・ニコライ【収録】2003年8月、フォルゼンライトシュレ（ザルツブルク音楽祭ライブ）【映像監督】ブライアン・ラーズ</p> <p>■全2幕／字幕：約2時間42分</p> |
| ロッシーニ・オペラ・フェスティバル2013『アルジェのイザベラ』 | 6,6,9,9,<br>11,11,1<br>9,19 | ロッシーニの喜劇オペラが、60年代のロマンティック・スパイ・コメディに変身。優れた歌唱力と美貌を誇るスター歌手ゴリャチョワが、“イタリア女”を好演。   | <p>毎夏、ロッシーニの生地ベーザロで開催される「ロッシーニ・オペラ・フェスティバル（ROF）」。2013年に音楽祭の最大の目玉として上演されたのが、初演200周年を迎えた『アルジェのイタリア女』でした。ロッシーニ自身が指揮をした初演（1813年）は大評判を取ったものの、有名な序曲を除けば、今日まで滅多に取り上げられてこなかったレアな傑作。おまけに、躍進中のアンナ・ゴリャチョワが題名役を演じ、前年のROFで『パピロニアのチロ』を成功させたダヴィデ・リヴェルモーレが演出を手がけるとあって、上演は大きな注目を集めました。</p> <p>リヴェルモーレは、物語の舞台を石油マネーで潤う1960年代のアルジェに再設定し、遊び心あふれるロマンティック・コメディに仕上げています。序曲に乗って流れる映像や、カラフルで派手な衣裳や照明、出演者たちの振付や身振りは、60年代の漫画やトレンド、映画『ピンク・パンサー』シリーズ、さらにはロディ映画『オースティン・パワーズ』等を彷彿させるもの。</p> <p>オペラは、スパイ映画『007』へのオマージュで幕開け。ポンド風のリンダーロがアルジェで拘束され、イタリアにいる恋人イザベラに電話でSOSを発信。すぐに救出に向かうイザベラですが、彼女が乗る旅客機がアルジェで墜落します……。</p> <p>番組の何よりの魅力は、この特異な演出に器用に応えつつ、見事な歌唱を聞かせる歌手陣。ゴリャチョワは、ノブルな声と確かな技術で作品の音楽的魅力を余すところなく伝えるいっぽう、恵まれた容姿を活かしたコメディエンヌとしての才能も天下一品です。ロッシーニの歌唱スタイルを十二分に会得したシー・イージェ（リンダーロ）の明朗な声質と、体当たりの演技で際立つアレックス・エスポーゾ（ムスタファ）の頑強な声質の対比も、聞き心地抜群。見せ場は少ないものの、マリオ・カッシ（タッデオ）とダヴィデ・ルチアーノ（ハリ）は、声量・声質の両面で特大の存在感を放っています。ホセ・ラモン・エンシナル指揮ポロニヤ市立劇場管の歯切れのよい音楽の運びも明快なサウンドも、聞き所のひとつです。</p> <p>【出演】アンナ・ゴリャチョワ（イザベラ／コントラルト）シー・イージェ（リンダーロ／テノール）アレックス・エスポーゾ（ムスタファ／バス）マリオ・カッシ（タッデオ／バス）マリアンジェラ・シチリア（エルヴィーラ／ソプラノ）ラファエラ・ルピナッチ（ズルマ／メゾ・ソプラノ）ダヴィデ・ルチアーノ（ハリ／バス）</p> <p>【演目】ジョアキーノ・ロッシーニ：オペラ（ドラマ・ジョコーソ）『アルジェのイタリア女』（アツィオ・コルギ校訂によるクリティカル・エディション）</p> <p>【台本】アンジェロ・アネリ【演出】ダヴィデ・リヴェルモーレ【装置・照明】ニコラ・ボヴェイ【衣裳】ジャンルーカ・ファラスキ【ビデオ・デザイン】D-Wok</p> <p>【指揮】ホセ・ラモン・エンシナル【演奏】ポロニヤ市立劇場管弦楽団および同合唱団（合唱指揮：アンドレア・フィドゥッティ）</p> <p>【収録】2013年8月テアトロ・ロッシーニ（ベーザロ）【映像監督】ティツィアーノ・マンチーニ ■字幕／全2幕：約2時間35分</p>  |

| 番組名                   | 放送日                     | 概要   | 曲目、出演者等   |
|-----------------------|-------------------------|--|---|
| ザルツブルク音楽祭2017『アリオダンテ』 | 1,1,3,3,11,11,14,14     | バルトリがヒゲづらにドレス！？ 男女の区別が錯綜するような配役と演出で、再評価著しいヘンデル・オペラの代表的傑作が上演された2017年ザルツブルク音楽祭 | <p>2019年にリリースされたアルバム『フアリネツ』のジャケット写真で、大胆なヒゲづらメイクが大きな話題を呼んだメゾ・ソプラノのチェチーリア・バルトリ。おそらくそのアイデアの素となったのが、今回お送りする2017年ザルツブルク音楽祭でのヘンデル『アリオダンテ』のプロダクションです。</p> <p>カストラートが歌ったアリオダンテを女性歌手が演じる一方で、初演では女性アルトが男役として歌った敵役のポリネッソを、ここではカウンターテナーのクリストフ・デュモアが演じているので、ちょうど性別が逆転した格好。そしてバルトリのアリオダンテは、最後はヒゲを剃って女性の姿で現れるので、見ていてちょっとしたジェンダーの混乱を誘う効果のある演出になっています。</p> <p>そのバルトリとデュモアはじめ、アリオダンテの婚約者ジネーヴラのキャサリン・レウィック（ソプラノ）、侍女タリンダのサンドリーヌ・ピオー（ソプラノ）、スコットランド国王のネイサン・バーグ（バリトン）ら、登場人物が次々と圧巻のアジリタのミスマを聴かせ、人間の声というのはこのようにコロコロと転がるものなのかと唖然。やがてそれが病みつきのような快感となってどっぷりハマる、恍惚の3時間半です。</p> <p>スコットランド国王の娘ジネーヴラは、騎士アリオダンテと婚約中。しかし彼女に横恋慕するポリネッソの策略で、彼と不貞を働いたという濡れ衣を着せられます。愛する女性に裏切られたと思いついで絶望したアリオダンテは自殺を図り、父王は不義の娘に死刑を宣告。しかし一命を取り留めたアリオダンテが戻ると、真実が明かされ、ハッピーエンドで幕を閉じます。</p> <p>アリオダンテとジネーヴラの二人の愛の行方はもちろん、わが娘への愛と王としての正義の板挟みになる父王の苦悩、ポリネッソの奸計で、そとは知らずに主人を裏切る仕掛け人にされてしまうアリオダンテの侍女タリンダの焦燥、姉の無実を信じ、タリンダへの想いを遂げる弟ルルカーニオの情熱。ドラマ的にも見どころの尽きない、注目すべき傑作です。</p> <p>【演目】 ゲオルク・フリードリヒ・ヘンデル：3幕のドラママ・ベル・ムージュ『アリオダンテ』<br/> 【出演】 チェチーリア・バルトリ（アリオダンテ／メゾ・ソプラノ） ネイサン・バーグ（スコットランド国王／バリトン） キャサリン・レウィック（ジネーヴラ／ソプラノ） ロラント・ピリヤソン（ルルカーニオ／テノール） クリストフ・デュモア（ポリネッソ／カウンターテナー） サンドリーヌ・ピオー（タリンダ／ソプラノ） クリストファー・ルンディン（オールド／テノール）<br/> 【演奏】 ジャルカ・カプアーノ（指揮） レ・ミュージシャン・デュ・フランス＝モナコ（モナコ公の音楽家たち）ザルツブルク・バハ合唱団（合唱指揮＝アロイス・グラスナー） 【演出】 クリストフ・ロイ 【舞台美術】 ヨハネス・ライアッー 【衣裳】 ウルズラ・レンツェンブリック 【照明】 ロラント・エートル 【振付】 アンドレアス・ハイゼ<br/> 【収録】 2017年、ザルツブルク、モーツァルトのための劇場（祝祭小劇場）（ザルツブルク 音楽祭ライブ） 【映像監督】 ティツァーノ・マンチーニ ■ 字幕／約3時間38分</p>   |
| ザルツブルク音楽祭2020『エレクトラ』  | 17,17,21,21,23,23,26,26 | 逆境のなか、不屈の意志で開催された創立100周年のザルツブルク音楽祭開幕を飾った『エレクトラ』。巧みな心理表現と、類まれな声の饗宴。           | <p>特殊な状況下での開催のため、上演されたオペラは2作品のみ。番組ではそのうち、8月1日の開幕を飾った、フランツ・ウェルザー＝メスト指揮、クシシュトフ・フルリコフスキ演出によるリヒャルト・シュトラウスの歌劇『エレクトラ』上演の模様をお届けします。</p> <p>シュトラウスの音楽は、ときに調性の枠を大きく逸脱して登場人物の多様な心理を表現しています。オーケストラの規模は巨大。クラリネット8人、ホルン8人、トランペット7人を含む管楽器群に、ヴァイオリン4部、ヴィオラ3部、チェロ2部とコントラバスという特殊な弦楽パートで、スコアには約110人の奏者が指定されている。オペラとしては異例の大規模編成です。凶悪な咆哮から美しい繊細な表情まで、ウェルザー＝メストがウィーン・フィルから多彩な音色を引き出しているのが、映像の音声からもはっきりと聴き取ることができます。</p> <p>同じ時期に日本で上演されたオペラでは、感染防止対策として、オーケストラを舞台上で演奏させたり、歌手にマスクやフェイス・シールドを付けたらといった苦心の対応が見られましたが、この公演では、さほど特別な対策は取っていないように見えます。巨大なオーケストラは「密」なビットに入って演奏し、カーテンコールでは歌手たちは手をつないで拍手に応じています。ただ、左右に広いフェルゼンライトショーレの舞台の間口いっぱいを使って演技しているのは、歌手同士との距離のキープに配慮した演出かもしれない。報道では出演者・スタッフへのPCR検査の徹底も伝えられていますが、このあたりの考え方の違いは興味深いところです。座席の間隔を空けて座っている聴衆からは、日本では自粛が求められている大きな歓声も飛んでいました。</p> <p>【演目】 リヒャルト・シュトラウス：1幕の悲劇『エレクトラ』<br/> 【指揮】 フランツ・ウェルザー＝メスト 【管弦楽】 ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団 【合唱】 ウィーン国立歌劇場合唱団（合唱指揮＝エルンスト・ラッフェルスベルガー）<br/> 【演出】 クシシュトフ・フルリコフスキ 【舞台＆衣裳】 マウゴルザー・タ・シジュニチャック 【照明】 フェリス・ロス 【振付】 クロード・バルドゥイク 【ドรามカルク】 クリスティアン・ロンジャン<br/> 【出演】 ターニャ・アリアーネ・バウムガルトナー（メゾ・ソプラノ／クリュテムネストラ） アウシュリネ・ストウンディーテ（ソプラノ／エレクトラ） アスミク・グリコリアン（ソプラノ／クリュテムネストラ） ミヒャエル・ラウレンツ（テノール／エギスト） テレク・ウェルトン（バス／バリトン／オレスト） テイルマン・レンネベック（バス／オレストの養育者） ヴェレティ・ウィングイト（ソプラノ／クリュテムネストラの据持ちの女） ヴァレリヤ・ザヴィンスカヤ（ソプラノ／クリュテムネストラの侍女） マトイス・シュミットレヒナー（テノール／若い従僕） イェンス・ラーゼン（バス／年老いた従僕） ソーニャ・シャリツチ（ソプラノ／監視の女） ポニータ・ハイマン（メゾ・コントラルト／5人の召使）、ケイティ・コヴェントリー（メゾ・ソプラノ／5人の召使）、デニス・ウズン（メゾ・ソプラノ／5人の召使）、シネイド・キャンベル＝ウォレス（ソプラノ／5人の召使）、ナタリア・タナジー（ソプラノ／5人の召使）<br/> 【収録】 2020年8月、ザルツブルク、フェルゼンライトショーレ 【映像監督】 ミリアム・ホイヤー ■ 字幕／約2時間</p> |

## コンサート

| 番組名                         | 放送日                   | 概要  | 曲目、出演者等  |
|-----------------------------|-----------------------|---|--|
| グリゴリー・ソコロフ「トリノ・リサイタル2017」   | 8,8,13,13,17,17,30,30 | 現代最高、幻のピアニストの貴重なライブ！<br>結晶化したとびきり美しいタッチが、深遠広大な宇宙を創造する                                 | <p>現代最高の演奏家の一人、「幻の”ピアニスト”といわれるグリゴリー・ソコロフ。1950年サンクトペテルブルク生まれのソコロフは、1966年にチャイコフスキー国際コンクールで優勝したものの、ソ連時代にあって国外での演奏機会がほとんどなく、彼の真価が知れわたるようになったのは、この20年ほどではないでしょうか。今やこの孤高の巨匠こそ本物中の本物と絶賛するファンが世界中に数知れず、彼のリサイタルを聴きに遠い国から駆けつけるファンもいるほど。当番組は、そんなソコロフのピアノを堪能できる、イタリアでの貴重なライブです。</p> <p>この日のプログラムはモーツァルトの八長調ソナタK.545、八短調の幻想曲K.475、そしてソナタK.457。そしてベートーヴェンの第27番と生涯最後の第32番という、2楽章形式のソナタの組み合わせです。すべての演奏において、ソコロフは雰囲気でも弾いたり、ケレンに走ったりすることは一切なく、正確無比のテクニックを駆使し、ひたすらその美しい音だけでシンパリに造型、厳しく曲を彫琢していきます。</p> <p>それにしてもなんとというピアニズムでしょうか。その次元の高さは耳を疑うほどです。</p> <p>彼のとびきり美しいタッチ—凝縮しきった結晶のような音で弾かれるモーツァルトはまさに純粹無垢で、極度の美しさのなかに悲しみが宿っているかのよう。そして八長調から八短調の曲への移行は天国から地獄へ連れて来られたかのような落差で、張り詰めた緊張感のなか、心臓の音が聞こえそうな静寂から、張り裂けんばかりの劇的なアレグロまで、感傷なき孤独な魂の劇が聴こえてきます。</p> <p>そして、ベートーヴェンではより人間的なドラマを描いています。第27番の第1楽章の悲愴感と、夢と希望が空の彼方へ飛翔していくような第2楽章、そして最後のソナタの厳しく劇的な第1楽章と、内省的で冬の星空のように澄んで静かに広がる第2楽章の鮮やかな対比は聴きもの。後者のソナタの終わり近く、高音域のトリルはまるで宇宙に響き渡る鐘の音のよう。</p> <p>アンコールのさまざまな曲におけるピアニズムも絶品。これほどの品位と奥深さを備えたピアノがほかどこで聴けるでしょうか。終演後、ファンにサインをするソコロフの優しい笑顔が、演奏中とは対照的で、これもまた感概を誘います。</p> <p>【演奏】 グリゴリー・ソコロフ（ピアノ）<br/> 【演目】 ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト：ピアノソナタ第15番 八長調 K.545、幻想曲 八短調 K.475、ピアノソナタ第14番 八短調 K.457 ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン：ピアノソナタ第27番 八短調 Op.90、ピアノソナタ第32番 八短調 Op.111 【アンコール】<br/> フランツ・シューベルト：「楽興の時」D780から第1番八長調 フレデリック・ショパン：ノクターン 八長調 Op.32-1、変イ長調 Op.32-2<br/> ジャン＝フィリップ・ラモーン：『クラヴサン・コンセール』から「軽はずみなおしゃべり」ロベルト・シューマン：アラベスク 八長調 Op.18<br/> クロード・ドビュッシー：前奏曲集第2巻から第10曲「カノーパ」【収録】2017年5月31日 トリノ、リンゴット・コングレス・センター<br/> 【映像監督】 ナディア・ノヴィコヴァ<br/> ■約2時間21分</p> |
| ティエレマン&ウィーン・フィル「ベートーヴェン：英雄」 | 20,20,23,23,31,31,0,0 | 21世紀初となるウィーン・フィルのベートーヴェン交響曲全集映像。ナポレオンが皇帝に即位すると作曲家は激怒のあまり献辞が書かれた表紙を破り捨てたというエピソードが有名。   | <p>ウィーン・フィルとして21世紀初のベートーヴェン交響曲全集映像より交響曲第3番『英雄』。会場は音楽の殿堂として名高いウィーン・フィルの本拠地ムジークフェラインゲール。指揮は21世紀の巨匠との呼び声高いクリスティアン・ティエレマン。『英雄』は、ナポレオンを賛美するために作曲され、彼が皇帝に即位するとベートーヴェンは激怒のあまり献辞が書かれた表紙を破り捨てたというエピソードが有名な交響曲の傑作。この番組は、ウィーン・フィル伝統の楽器配置、柔らかな響きの弦さ、ドイツ伝統の構築性と現代性を兼ね備えた、まさに新たな時代を迎えたウィーン・フィル「ベートーヴェン：英雄」映像の決定版。</p> <p>【演目】ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン：交響曲第3番変ホ長調Op.55『英雄』【指揮】クリスティアン・ティエレマン【演奏】ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団【収録】2009年3月ムジークフェラインゲール（ウィーン）【映像監督】アグネス・メス<br/> ■約1時間4分</p>  |
| ムターのモーツァルト『ヴァイオリン協奏曲第1番』    | 1,1,3,3,6,6,12,12     | 2006年のモーツァルト生誕250年と自身のデビュー30周年を記念し、「ヴァイオリンの女王」アンネ＝ゾフィー・ムターが弾き振りしたモーツァルトのヴァイオリン協奏曲第1番。 | <p>「モーツァルトは自分の成長に欠かせない作曲家であり、私のキャリアの節目には必ずモーツァルトがいる」と語る彼女の艶やかなヴァイオリンはもちろん、カデンツァに19世紀後半から20世紀初頭にかけてヴァイオリンの名教師として名を馳せたハンス・ジットのバージョンを演奏しているのも音楽ファンには見どころ。</p> <p>【演目】ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト：ヴァイオリン協奏曲第1番変ロ長調K.207（カデンツァ：ハンス・ジット）<br/> 【ヴァイオリン&amp;指揮】アンネ＝ゾフィー・ムター【演奏】カメラータ・ザルツブルク<br/> 【収録】2005年12月3日～6日ザルツブルク大学大講堂【映像監督】アンディ・ゾマー<br/> ■約24分</p>  |
| ムターのモーツァルト『ヴァイオリン協奏曲第2番』    | 1,1,3,3,6,6,12,12     | 2006年のモーツァルト生誕250年と自身のデビュー30周年を記念し、「ヴァイオリンの女王」アンネ＝ゾフィー・ムターが弾き振りしたモーツァルトのヴァイオリン協奏曲第2番。 | <p>「モーツァルトは自分の成長に欠かせない作曲家であり、私のキャリアの節目には必ずモーツァルトがいる」と語る彼女の艶やかなヴァイオリンはもちろん、カデンツァに20世紀の名ヴァイオリニスト、ジノ・フランチェスカッティのバージョンを演奏しているのも音楽ファンには見どころ。</p> <p>【演目】ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト：ヴァイオリン協奏曲第2番二長調K.211（カデンツァ：ジノ・フランチェスカッティ）<br/> 【ヴァイオリン&amp;指揮】アンネ＝ゾフィー・ムター【演奏】カメラータ・ザルツブルク<br/> 【収録】2005年12月3日～6日ザルツブルク大学大講堂【映像監督】アンディ・ゾマー<br/> ■約23分</p>  |

| 番組名                             | 放送日                  | 概要   | 曲目、出演者等   |
|---------------------------------|----------------------|--|---|
| ムターのモーツァルト『ヴァイオリン協奏曲第3番』        | 1,1,3,3,6,6,12,12    | 2006年のモーツァルト生誕250年と自身のデビュー30周年を記念し、"ヴァイオリンの女王"アンネ=ゾフィー・ムターが弾き振りしたモーツァルトのヴァイオリン協奏曲第3番。                                    | 「モーツァルトは自分の成長に欠かせない作曲家であり、私のキャリアの節目には必ずモーツァルトがいる」と語る彼女の艶やかなヴァイオリンはもちろん、カデンツァにサム・フランコ版を演奏しているのも音楽ファンには見どころ。<br><br>[演目]ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト：ヴァイオリン協奏曲第3番長調K.216（カデンツァ：サム・フランコ）<br>[ヴァイオリン&指揮]アンネ=ゾフィー・ムター[演奏]カメラータ・ザルツブルク<br>[収録]2005年12月3日～6日ザルツブルク大学大講堂[映像監督]アンディ・ゾマー<br>■約29分   |
| ムターのモーツァルト『ヴァイオリン協奏曲第4番』        | 1,1,3,3,6,6,12,12    | 2006年のモーツァルト生誕250年と自身のデビュー30周年を記念し、"ヴァイオリンの女王"アンネ=ゾフィー・ムターが弾き振りしたモーツァルトのヴァイオリン協奏曲第4番。                                    | 「モーツァルトは自分の成長に欠かせない作曲家であり、私のキャリアの節目には必ずモーツァルトがいる」と語る彼女の艶やかなヴァイオリンはもちろん、カデンツァにブラームスのヴァイオリン協奏曲の初演者として名高いヨーゼフ・ヨアヒムのバージョンを演奏しているのも音楽ファンには見どころ。<br><br>[演目]ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト：ヴァイオリン協奏曲第4番二長調K.218（カデンツァ：ヨーゼフ・ヨアヒム）<br>[ヴァイオリン&指揮]アンネ=ゾフィー・ムター[演奏]カメラータ・ザルツブルク<br>[収録]2005年12月3日～6日ザルツブルク大学大講堂[映像監督]アンディ・ゾマー<br>■約27分  |
| ムターのモーツァルト『ヴァイオリン協奏曲第5番』        | 1,1,3,3,6,6,12,12    | 2006年のモーツァルト生誕250年と自身のデビュー30周年を記念し、"ヴァイオリンの女王"アンネ=ゾフィー・ムターが弾き振りしたモーツァルトのヴァイオリン協奏曲第5番。                                    | 「モーツァルトは自分の成長に欠かせない作曲家であり、私のキャリアの節目には必ずモーツァルトがいる」と語る彼女の艶やかなヴァイオリンはもちろん、カデンツァに19世紀の大ヴァイオリニスト、ヨーゼフ・ヨアヒムのバージョンをオッシブ・シュニルリンが改訂したバージョンを演奏しているのも音楽ファンには見どころ。<br><br>[演目]ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト：ヴァイオリン協奏曲第5番二長調K.219『トルコ風』（カデンツァ：ヨーゼフ・ヨアヒム～オッシブ・シュニルリンによるニューバージョン）<br>[ヴァイオリン&指揮]アンネ=ゾフィー・ムター[演奏]カメラータ・ザルツブルク<br>[収録]2005年12月3日～6日ザルツブルク大学大講堂[映像監督]アンディ・ゾマー<br>■約32分   |
| ティレマン&ベルリン・フィル「R・シュトラウスとブルックナー」 | 2,2,4,4,2,1,21,29,29 | 現代のカリスマ指揮者クリスティアン・ティレマンがベルリン・フィルの定期演奏会で指揮した大評判となったコンサート。曲はティレマンが十八番とするR・シュトラウスとブルックナー。                                   | 「オーボエ協奏曲」ではベルリン・フィルの首席オーボエ奏者でソリスト、室内楽でも国際的に活躍するアルブレヒト・マイヤーがソリストで登場し、その妙技と上品な音色、ベルリン・フィルとの息の合った共演でオーボエの魅力を最大限に引き出してくれる。ブルックナーの交響曲ではティレマンが炸裂。スーパーオーケストラ、ベルリン・フィルが光輝くブルックナー像を見せつけ、演奏後の静寂まで一瞬たりとも目が離せない。<br><br>[演目]リヒャルト・シュトラウス：オーボエ協奏曲二長調Op.144、ヨハン・セバスティアン・バッハ：カンタータ第156番『わが片足は墓穴にありて』BWV.156～第1曲「シンフォニア」（アリオソ）、アントン・ブルックナー：交響曲第4番変ホ長調『ロマンティック』WAB.104（1878/80年版）[指揮]クリスティアン・ティレマン[演奏]ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団、アルブレヒト・マイヤー（オーボエ）[収録]2012年3月4日フィルハーモニー（ベルリン）[映像監督]アンドレアス・モレル<br>■字幕/約1時間55分  |
| チェコ・フィルのドヴォルザーク『新世界より』          | 7,7,9,9,12,12,22,22  | 楽団員の99%がチェコ人であるチェコ・フィルと、2012年に20年ぶりに首席指揮者として同楽団に戻ってきたチェコ人指揮者イルジー・ビエロフラーヴェクによる、21世紀新時代の「ドヴォルザーク交響曲全集」より、最後の交響曲第9番『新世界より』。 | 収録は、チェコ・フィルの本拠地ドヴォルザーク・ホール。<br>数多ある交響曲の中で最も有名な『新世界より』は、ニューヨークのナショナル音楽院院長に招かれたドヴォルザークが1893年にアメリカで作曲、同年12月16日カーネギーホールでニューヨーク・フィルによって初演されました。日本では『家路』（『遠き山に日は落ちて』）のタイトルで音楽の教科書にも取り上げられる第2楽章が有名。第4楽章の冒頭は、鉄道ファンであったドヴォルザークが蒸気機関車の動き出す音を描写したと言われています。<br>1896年にドヴォルザーク自身も指揮した歴史と由緒あるチェコ・フィルは、現在では1986年生まれコンサートマスター、ヨーゼフ・シュバチェクを筆頭にベテランと若手が融合され、新たな歴史を歩み始めました。この番組でも、チェコ・フィル本来の美しい響きはそのままで、音楽のスピード感と推進力、そして隔々までクリアでフレッシュなサウンドは、これまでのチェコ・フィルの印象や先入観が一変されること間違いなし。ドヴォルザークに新しい命を吹き込んだビエロフラーヴェクの音楽作りと情熱的な指揮も見逃せません。<br>自国の英雄的作曲家の全交響曲を2シーズンかけて打って出た、ビエロフラーヴェク&チェコ・フィルの気概と自信、そしてドヴォルザークへの共感と尊敬が伝わる本家本元の演奏です。『新世界より』映像の中で、最も新たな発見と驚きが体験できる番組。まさに永久保存版。必見です。<br>[演目]アントニン・ドヴォルザーク：交響曲第9番短調Op.95,B.178『新世界より』[指揮]イルジー・ビエロフラーヴェク[演奏]チェコ・フィルハーモニー管弦楽団[収録]2013年11月13日～15日「ルドルフィヌム」内ドヴォルザーク・ホール（プラハ）[映像監督]アダム・レゼク<br>■約48分 |

| 番組名                      | 放送日                   | 概要  | 曲目、出演者等  |
|--------------------------|-----------------------|---|--|
| ベルチャ四重奏団『プリテン：弦楽四重奏曲第1番』 | 5,5,10,10,16,16,27,27 | この番組は、ベルチャ四重奏団がバリの伝説的なスタジオ・ダヴーに少人数の観客を集めて一挙収録した、20世紀英国の作曲家プリテンの弦楽四重奏曲全3曲より第1番。                      | <p>新時代を疾走する弦楽四重奏団として世界的に注目を集めるベルチャ四重奏団は、ルーマニア人の女性ヴァイオリニスト、コリーナ・ベルチャとポーランド人男性ヴィオラ奏者、クシシュトフ・ホジェルスキーを中心に、1994年英国王立音楽大学で結成。大阪国際室内コンクールとボルドー国際弦楽四重奏コンクール優勝以来キャリアを重ね、英国をベースとする弦楽四重奏団では最も高い人気を誇っています。</p> <p>プリテンが親友（恋人）のテノール、ピーター・ピアーズと共に、第二次世界大戦の戦火を避けてアメリカに移住していた1941年、作曲家28歳の作品です。調性音楽を基本としながら、そのモダンな感覚と新鮮な響きは、晦渋な現代音楽と一線を画すもの。プリテンの弦楽四重奏曲はそれほど有名ではないかもしれませんが、ロックやジャズ好きにも興味を持ってもらえるカッコ良さを、是非一度体験してもらいたい。</p> <p>見どころは、ベルチャ四重奏団の研ぎ澄まされた集中力と極限までの緊張感。彼らの特徴であるヴィヴリッドで透明なサウンドとダイナミックな表情、その知的で先鋭的なアンサンブルはスリル満点。自らの音楽を各々思い切り表現するところも深い。時に目配りし、時に戦いを挑むような4人の丁々発止の姿は映像ならではの面白さ。紅一点のコリーナ・ベルチャと3人の男性アーティストの視線の絡み合いはドキドキものです。</p> <p>どんな楽曲にも活き活きとした生命を吹き込むベルチャ四重奏団のスタイリッシュな映像は、セッションのような興奮をテレビで伝えてくれます。</p> <p>[演目]ベンジャミン・プリテン：弦楽四重奏曲第1番二長調Op.28<br/> [演奏]ベルチャ四重奏団（第1ヴァイオリン：コリーナ・ベルチャ、第2ヴァイオリン：アクセル・シャハー、ヴィオラ：クシシュトフ・ホジェルスキー、チェロ：アントワーヌ・ルテルラン）<br/> [収録]2014年6月スタジオ・ダヴー（バリ）【映像監督】フレデリック・ドゥレク<br/> ■約29分</p>  |
| ベルチャ四重奏団『プリテン：弦楽四重奏曲第2番』 | 2,2,4,4,7,10,10,15    | この番組は、ベルチャ四重奏団がバリの伝説的なスタジオ・ダヴーに少人数の観客を集めて一挙収録した、20世紀英国の作曲家プリテンの弦楽四重奏曲全3曲より第2番。                      | <p>新時代を疾走する弦楽四重奏団として世界的に注目を集めるベルチャ四重奏団は、ルーマニア人の女性ヴァイオリニスト、コリーナ・ベルチャとポーランド人男性ヴィオラ奏者、クシシュトフ・ホジェルスキーを中心に、1994年英国王立音楽大学で結成。大阪国際室内コンクールとボルドー国際弦楽四重奏コンクール優勝以来キャリアを重ね、英国をベースとする弦楽四重奏団では最も高い人気を誇っています。</p> <p>親友（恋人）のテノール、ピーター・ピアーズが17世紀英国の作曲家ヘンリー・パーセルに取り組んでおり、パーセル没後250年の1945年に作曲。ミステリアスな第1楽章と疾走する第2楽章、そしてパーセルの『シャコンヌ』がモチーフの長大な第3楽章。静謐から爆発のドラマティックなサウンドがもの凄い迫力を生み出します。</p> <p>調性音楽を基本としながら、そのモダンな感覚と新鮮な響きは、晦渋な現代音楽と一線を画すもの。プリテンの弦楽四重奏曲はそれほど有名ではないかもしれませんが、ロックやジャズ好きにも興味を持ってもらえるカッコ良さを、是非一度体験してもらいたい。</p> <p>見どころは、ベルチャ四重奏団の研ぎ澄まされた集中力と極限までの緊張感。彼らの特徴であるヴィヴリッドで透明なサウンドとダイナミックな表情、その知的で先鋭的なアンサンブルはスリル満点。自らの音楽を各々思い切り表現するところも深い。時に目配りし、時に戦いを挑むような4人の丁々発止の姿は映像ならではの面白さ。紅一点のコリーナ・ベルチャと3人の男性アーティストの視線の絡み合いはドキドキものです。</p> <p>どんな楽曲にも活き活きとした生命を吹き込むベルチャ四重奏団のスタイリッシュな映像は、セッションのような興奮をテレビで伝えてくれます。</p> <p>[演目]ベンジャミン・プリテン：弦楽四重奏曲第2番八長調Op.36<br/> [演奏]ベルチャ四重奏団（第1ヴァイオリン：コリーナ・ベルチャ、第2ヴァイオリン：アクセル・シャハー、ヴィオラ：クシシュトフ・ホジェルスキー、チェロ：アントワーヌ・ルテルラン）<br/> [収録]2014年6月スタジオ・ダヴー（バリ）【映像監督】フレデリック・ドゥレク<br/> ■約33分</p> |
| ベルチャ四重奏団『プリテン：弦楽四重奏曲第3番』 | 1,1,3,3,11,11,14,14   | この番組は、ベルチャ四重奏団がバリの伝説的なスタジオ・ダヴーに少人数の観客を集めて一挙収録した、20世紀英国の作曲家プリテンの弦楽四重奏曲全3曲より、1976年、亡くなる数ヶ月前に作曲された第3番。 | <p>新時代を疾走する弦楽四重奏団として世界的に注目を集めるベルチャ四重奏団は、ルーマニア人の女性ヴァイオリニスト、コリーナ・ベルチャとポーランド人男性ヴィオラ奏者、クシシュトフ・ホジェルスキーを中心に、1994年英国王立音楽大学で結成。大阪国際室内コンクールとボルドー国際弦楽四重奏コンクール優勝以来キャリアを重ね、英国をベースとする弦楽四重奏団では最も高い人気を誇っています。</p> <p>番号付き作品としては最後から2番目。プリテンはまだ62歳。ヴェネツィアの美に触発されたといわれ、晩年のプリテンらしい透明感にあふれた名曲です。最終楽章の宗教曲のような、しかしゆっくりと前を向いて歩いて歩んでいくような音楽に、誰もが胸打たれるのではないのでしょうか。</p> <p>調性音楽を基本としながら、そのモダンな感覚と新鮮な響きは、晦渋な現代音楽と一線を画すもの。プリテンの弦楽四重奏曲はそれほど有名ではないかもしれませんが、ロックやジャズ好きにも興味を持ってもらえるカッコ良さを、是非一度体験してもらいたい。</p> <p>見どころは、ベルチャ四重奏団の研ぎ澄まされた集中力と極限までの緊張感。彼らの特徴であるヴィヴリッドで透明なサウンドとダイナミックな表情、その知的で先鋭的なアンサンブルはスリル満点。自らの音楽を各々思い切り表現するところも深い。時に目配りし、時に戦いを挑むような4人の丁々発止の姿は映像ならではの面白さ。紅一点のコリーナ・ベルチャと3人の男性アーティストの視線の絡み合いはドキドキものです。</p> <p>どんな楽曲にも活き活きとした生命を吹き込むベルチャ四重奏団のスタイリッシュな映像は、セッションのような興奮をテレビで伝えてくれます。</p> <p>[演目]ベンジャミン・プリテン：弦楽四重奏曲第3番Op.94<br/> [演奏]ベルチャ四重奏団（第1ヴァイオリン：コリーナ・ベルチャ、第2ヴァイオリン：アクセル・シャハー、ヴィオラ：クシシュトフ・ホジェルスキー、チェロ：アントワーヌ・ルテルラン）<br/> [収録]2014年6月スタジオ・ダヴー（バリ）【映像監督】フレデリック・ドゥレク</p>                                     |

| 番組名                        | 放送日                  | 概要  | 曲目、出演者等   |
|----------------------------|----------------------|---|---|
| ウイーン国立バレエ2016『ドン・キホーテ』     | 5,5,8,8,24,27,27     | シューマン絶頂期の大作オラトリオ。巨匠の風格さえ漂い始めたハーディングと名門バリ管の蜜月の始まりを告げる。ファースト・シーズンの記念すべきライブ。 | <p>日本では非常に演奏機会が少ないロベルト・シューマンのオラトリオ『楽園とベリ』を、ダニエル・ハーディングとバリ管弦楽団の演奏でお届けします。</p> <p>2016年シーズンから、バヴォ・ヤルヴィの後任としてバリ管弦楽団の音楽監督に就任したハーディング。同年9月にシーズン開幕の就任記念コンサートで『ゲーテのファウストからの情景』を演奏したの続いて、12月の演奏会で取り上げたのが、同じシューマンのこの大作でした。ハーディングは当時41歳ですが、日本でもよく知られているように若くしてデビューした彼は、この時点ですでに20年以上のキャリア。すでに若き巨匠の風格さえ漂います。</p> <p>シューマンは、1840年の「歌の年」、1841年の「交響曲の年」、1842年の「室内楽の年」と、年ごとに特定のジャンルに集中して創作の範囲を拡大していった作曲家ですが、その集大成として1843年に完成したのがこのオラトリオ『楽園とベリ』でした。シューマンの創作の絶頂期を象徴する代表作といえるでしょう。</p> <p>独唱は、構成上、題名役のベリを歌うソプラノと、ナレーター役を務めるテノールが占めるウェイトが大きい作品です。近年の活躍目覚ましいドイツ人ソプラノのクリスティアーネ・カルクが、陰影の深い大人びた表情のベリを聴かせれば、英国のリリック・テノール、アンドリュース・ステイブルズもクリアな響きで好演。そして、ここぞという部分にびたりとはまる現代最高のバリトン、マティアス・ゲルネのピロートの声の心地よさにはため息が出るばかりです。また、独唱陣と同等以上にクオリティが要求されるのが合唱です。ここでは、1978年生まれの合唱指揮者リオネル・ソウが率いるバリ管弦楽団合唱団が、男声合唱から女声合唱、メンバーによる重唱まで、多彩なヴァリエーションの編成にいずれも実力を示して、合唱ファンにとっても魅力的なこの作品の要求に十二分に応えています。</p> <p>題名の「ベリ」は、楽園を追われた美しい妖精の名前です。悲嘆にくれる彼女の歌に心動かされた天使は、「天の心にかなう捧げもの」を条件に、彼女を楽園に戻そうと約束します。ベリはインドへ、アフリカへ、シリアへと舞い降りて、さまざまな悲しみと出会った末に、ついに楽園に復帰するのにふさわしい捧げものを得るのです。</p> <p>[演目]ロベルト・アレクサンダー・シューマン：オラトリオ『楽園とベリ』Op.50 [指揮]ダニエル・ハーディング [演奏]バリ管弦楽団及び合唱団、クリスティアーネ・カルク（ベリ/ソプラノ） ケイト・ロイヤル（ソプラノ） ゲルヒルト・ロンベルガー（メゾ・ソプラノ） アンドリュース・ステイブルズ（テノール） マティアス・ゲルネ（バリトン） フィリップ・アイシュ（ソロ・ヴァイオリン/バリ管コンサートマスター） [合唱指揮]リオネル・ソウ [収録] 2016年12月21日 &amp; 22日フィルハーモニー・ド・パリ [映像監督] フランソワ＝ルネ・マルタン<br/>■字幕/約1時間37分</p>   |
| 聖霊のハーモニー～システィーナ礼拝堂聖歌隊の宗教音楽 | 20,20,25,25,31,0,0,0 | カトリック教会の頂点に位置するローマの世界遺産ラテラノ大聖堂に、かつてその楽長であったバレストリーナの美しいポリフォニーが降りそそぐ！       | <p>ローマの世界遺産、サン・ジョヴァンニ・イン・ラテラノ大聖堂で2011年11月に行なわれた「聖霊のハーモニー」コンサート。「イタリアのバジリカのための音楽による瞑想」というサブタイトルが付された本コンサートは、2013年に生前退位した教皇ベネディクト16世の発案で、歴史的に重要な文化遺産である教会の中で宗教音楽の伝統を継承する目的で行なわれました。</p> <p>サン・ジョヴァンニ・イン・ラテラノ大聖堂は、ローマの「四大バジリカ」のひとつに数えられる重要な教会です。バジリカとは、宗教上の格式により定められた大聖堂のことで、ローマの他の3つは、サン・ピエトロ大聖堂、サンタ・マリア・マッジョーレ大聖堂、サン・パオロ・フォーリ・レ・ムラ大聖堂です。4世紀のミラノ勅令でコンスタンティヌス帝がキリスト教を公認して以来、14世紀までの約千年間、教皇庁はヴァチカンではなくここに置かれており、カトリックの総本山でした。現在もローマ教区の司教座であり、教会としてはヴァチカンより格上の存在です。聖堂は16世紀以降に何度か修復され、現在のバロック様式の絢爛な装飾は1735年に完成しています。番組では、聖ペテロと聖パウロの聖遺物（頭蓋骨）が収められているという教皇専用祭壇を始め、教会内の威厳に満ちた雰囲気もたっぷりとお楽しみいただけます。</p> <p>歌っているのは、世界最古の聖歌隊とされるヴァチカンのシスティーナ礼拝堂聖歌隊。彼らの門外不出の秘曲だった「ミゼレレ」を、モーツァルトが一度聴いただけで採譜してしまったというエピソードは有名です。日本では、ルネサンスの合唱曲は無伴奏で演奏するのが当たり前と受け取られがちですが、当時は任意の楽器を自由に加えるほうが一般的でした。システィーナ礼拝堂では歴史的に無伴奏を伝統としており、現在「無伴奏」を「ア・カペラ」と呼ぶのは、「a cappella」＝「（システィーナ）礼拝堂にて」が由来と言われています。</p> <p>プログラムは、サン・ジョヴァンニ・イン・ラテラノ大聖堂の楽長を務めたジョヴァンニ・ダ・バレストリーナの作品を中心に、聖週間、クリスマス、聖霊降臨祭といった教会暦の1年を祝うさまざまな聖歌が、光のように降り注ぎます。システィーナ礼拝堂聖歌隊が、単旋聖歌では抑制的に、ポリフォニー作品では思いのほかアグレッシブに歌いきっているのが印象的。これが初演と謳われている、システィーナ礼拝堂の楽長だった20世紀の宗教音楽家ロレンツォ・ペロージの「ペトロを使徒の務めにつかせたお方は」、番組の見どころのひとつ。</p> <p>合唱曲と交互に演奏されるサン・ジョヴァンニ・イン・ラテラノ大聖堂のオルガンは、16世紀末に作られた貴重な楽器です。設置当初は1段マニュアル（手鍵盤）でしたが、1747年に改修して2段鍵盤になりました。その後、聖堂に別の2台のオルガンが並設されたこともあって、19世紀末から約1世紀にわたり使用されない時期もありましたが、1980年代に大規模な補修が施されてよみがえり、イタリアのルネサンス・オルガンの魅力である素朴で澄んだ音を伝えています。</p> <p>[演目]グレゴリオ聖歌：されど我らことほがん、ジョヴァンニ・ピエルイーゼ・ダ・バレストリーナ：シオンでラッパを吹きならせ/今日キリストは生まれたもう/第5旋法のリチエルカーレ/第6旋法のリチエルカーレ/教皇マルチェリスのミサ曲～「キリエ」、グレゴリオ聖歌：キリストは我らのために従順であられた、パブロ・フルーナ：第2旋法による不協和音のテイメント、トマス・ルイス・デ・ビクトリア：聖週間のためのレスポンスリウム集～「おお、すべて道行くものよ」、ジローモ・フレスコバルディ：トッカータ第2番、ロレンツォ・ペロージ：ペトロを使徒の務めにつかせたお方は、ジョヴァンニ・ピエルイーゼ・ダ・バレストリーナ：聖霊降臨祭の夕食をともにしている時/教皇マルチェリスのミサ曲～「グローリア」[企画]クラウディオ・オライツィ[指揮]マッシモ・パロンベッラ[演奏]システィーナ礼拝堂聖歌隊、ファン・バラテル・ソレー（オルガン） [収録]2011年11月11日サン・ジョヴァンニ・イン・ラテラノ大聖堂（ローマ） [映像監督]ティツィアーノ・マンチーニ<br/>■字幕/約57分</p> |

| 番組名                          | 放送日               | 概要   | 曲目、出演者等   |
|------------------------------|-------------------|--|---|
| ホフマン&セリグ『ベートーヴェン：チェロ・ソナタ第1番』 | 1,1,3,3,6,6,12,12 | チェロのゲイリー・ホフマンが、一晩でベートーヴェンのチェロ・ソナタ全曲に挑む。誠実で緻密な解釈で、懐深い名演を実現。第1番から手堅くも理想的な演奏。     | <p>2020年はベートーヴェン生誕250周年のアニバーサリーで、多くのベートーヴェン演奏、録音、録画に触れられるはず。その中でも渋い存在感を放つ番組が、2019年5月、ベルギーのエリザベト王妃音楽院で、チェロ・ソナタ全5曲を一晩で弾ききった公演映像です。</p> <p>チェロのゲイリー・ホフマンは、欧米で高い評価を得ているカナダ出身の奏者。1986年にはバリのロストロポヴィチ国際チェロ・コンクールで優勝するなど、華々しい経歴をもつ名手です。しかし彼は技巧をひけらかすことなく、地道に作品と楽器と向き合い、堅実に誠実に演奏活動を続けてきました。そのことはこのベートーヴェンでもよくわかります。ピアノのデイヴィッド・セリグはオーストラリア出身、やはり欧米で堅実な活動を繰り返していて、ホフマンと共に録音も残しています。気心知れた二人のデュオはほとんど対話という趣で、アマティのチェロとベーゼンドルファーのピアノのきめ細かく深い音色がその空気をさらに深めます。彼らの名技は冴え、技術的には完璧に近く、ライブらしい熱気も十分ですが、最後に印象に残るのは丁寧さと誠実さ。デュオの理想的な姿のひとつと言えるでしょう。技巧を前面に出す派手な演奏ではなく、じっくり聴きこめる演奏で楽聖のチェロ・ソナタの深みを味わいたい方にこそお薦めの映像です。</p> <p>2曲セットで作られた第1番と第2番は、1796年というハイドン存命中の作品ながら、ベートーヴェンらしく強烈な個性を押し出して、先達とは全く違うものを作るといふ迫りがある名作です。ふたつの長い楽章で構成される第1番も、第1楽章の序奏からすでにロマンティックで長大、アレグロの主部は緻密にして気宇壮大。第2楽章のロンドも、それまでには有り得ないほど重量級。ホフマンとセリグの深い解釈と各楽器の美音に満ちた演奏から、時代を先取りしたベートーヴェンの思いが立ちのぼってきます。</p> <p>【演目】 ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン：チェロ・ソナタ第1番へ長調Op.5-1<br/> 【チェロ】 ゲイリー・ホフマン【ピアノ】デイヴィッド・セリグ 【収録】 2019年5月2日エリザベト王妃音楽院(ワールロー) 【映像監督】 フレデリック・テレスク<br/> ■約29分</p>          |
| ホフマン&セリグ『ベートーヴェン：チェロ・ソナタ第2番』 | 1,1,3,3,6,6,12,12 | チェロのゲイリー・ホフマンが、一晩でベートーヴェンのチェロ・ソナタ全曲に挑む。誠実で緻密な解釈で、懐深い名演を実現。ピアノの技巧も光る第2番。        | <p>2020年はベートーヴェン生誕250周年のアニバーサリーで、多くのベートーヴェン演奏、録音、録画に触れられるはず。その中でも渋い存在感を放つ番組が、2019年5月、ベルギーのエリザベト王妃音楽院で、チェロ・ソナタ全5曲を一晩で弾ききった公演映像です。</p> <p>チェロのゲイリー・ホフマンは、欧米で高い評価を得ているカナダ出身の奏者。1986年にはバリのロストロポヴィチ国際チェロ・コンクールで優勝するなど、華々しい経歴をもつ名手です。しかし彼は技巧をひけらかすことなく、地道に作品と楽器と向き合い、堅実に誠実に演奏活動を続けてきました。そのことはこのベートーヴェンでもよくわかります。ピアノのデイヴィッド・セリグはオーストラリア出身、やはり欧米で堅実な活動を繰り返していて、ホフマンと共に録音も残しています。気心知れた二人のデュオはほとんど対話という趣で、アマティのチェロとベーゼンドルファーのピアノのきめ細かく深い音色がその空気をさらに深めます。彼らの名技は冴え、技術的には完璧に近く、ライブらしい熱気も十分ですが、最後に印象に残るのは丁寧さと誠実さ。デュオの理想的な姿のひとつと言えるでしょう。技巧を前面に出す派手な演奏ではなく、じっくり聴きこめる演奏で楽聖のチェロ・ソナタの深みを味わいたい方にこそお薦めの映像です。</p> <p>2曲セットで作られた第1番と第2番は、1796年というハイドン存命中の作品ながら、ベートーヴェンらしく強烈な個性を押し出して、先達とは全く違うものを作るといふ迫りがある名作です。5曲の中で唯一の短調である第2番は、前作の第1番と同じくふたつの長い楽章で構成されますが、暗く思索的な第1楽章の序奏は、単独の楽章と言えるほどの規模を持ちます。主部は暗い情熱に光も見える充実の音楽で、ピアノの技巧も光ります。第2楽章は一転して明るいロンドで、変化に富んだ音楽で二人の熱演と名技で楽しめられます。</p> <p>【演目】 ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン：チェロ・ソナタ第2番短調Op.5-2<br/> 【チェロ】 ゲイリー・ホフマン【ピアノ】デイヴィッド・セリグ 【収録】 2019年5月2日エリザベト王妃音楽院(ワールロー) 【映像監督】 フレデリック・テレスク<br/> ■約32分</p> |
| ホフマン&セリグ『ベートーヴェン：チェロ・ソナタ第3番』 | 1,1,3,3,6,6,12,12 | チェロのゲイリー・ホフマンが、一晩でベートーヴェンのチェロ・ソナタ全曲に挑む。誠実で緻密な解釈で、懐深い名演を実現。深く、力強く、美しい演奏で大作第3番を。 | <p>2020年はベートーヴェン生誕250周年のアニバーサリーで、多くのベートーヴェン演奏、録音、録画に触れられるはず。その中でも渋い存在感を放つ番組が、2019年5月、ベルギーのエリザベト王妃音楽院で、チェロ・ソナタ全5曲を一晩で弾ききった公演映像です。</p> <p>チェロのゲイリー・ホフマンは、欧米で高い評価を得ているカナダ出身の奏者。1986年にはバリのロストロポヴィチ国際チェロ・コンクールで優勝するなど、華々しい経歴をもつ名手です。しかし彼は技巧をひけらかすことなく、地道に作品と楽器と向き合い、堅実に誠実に演奏活動を続けてきました。そのことはこのベートーヴェンでもよくわかります。ピアノのデイヴィッド・セリグはオーストラリア出身、やはり欧米で堅実な活動を繰り返していて、ホフマンと共に録音も残しています。気心知れた二人のデュオはほとんど対話という趣で、アマティのチェロとベーゼンドルファーのピアノのきめ細かく深い音色がその空気をさらに深めます。彼らの名技は冴え、技術的には完璧に近く、ライブらしい熱気も十分ですが、最後に印象に残るのは丁寧さと誠実さ。デュオの理想的な姿のひとつと言えるでしょう。技巧を前面に出す派手な演奏ではなく、じっくり聴きこめる演奏で楽聖のチェロ・ソナタの深みを味わいたい方にこそお薦めの映像です。</p> <p>5曲中もっとも有名な第3番は、30代後半の壮年期にあたる1808年の傑作で、どこを取っても充実した力強い音楽で構成されています。チェロの無伴奏の朗唱で始まる冒頭から、別の次元に連れていかれるような音楽ですが、ホフマンはあえて淡々と弾き始めることで、聴く人にはかえって作品そのものの力を実感させます。よく知られた作品だけに、ホフマンとセリグの落ち着いた深い解釈と、それを完全に実現する高い技術と美音を、他の曲以上に満喫できることでしょう。ベートーヴェン中期の名作をご堪能ください。</p> <p>【演目】 ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン：チェロ・ソナタ第3番へ長調Op.69<br/> 【チェロ】 ゲイリー・ホフマン【ピアノ】デイヴィッド・セリグ 【収録】 2019年5月2日エリザベト王妃音楽院(ワールロー) 【映像監督】 フレデリック・テレスク<br/> ■約31分</p>      |



| 番組名                          | 放送日                   | 概要   | 曲目、出演者等  |
|------------------------------|-----------------------|--|--|
| ホフマン&セリグ『ベートーヴェン：チェロ・ソナタ第4番』 | 1,1,3,3,6,6,12,12     | チェロのゲイリー・ホフマンが、一晩でベートーヴェンのチェロ・ソナタ全曲に挑む。誠実で緻密な解釈で、懐深い名演を実現。ユニークな第4番を巧みに聴かせる。  | <p>2020年はベートーヴェン生誕250周年のアニバーサリーで、多くのベートーヴェン演奏、録音、録画に触れられるはず。その中でも渋い存在感を放つ番組が、2019年5月、ベルギーのエリザベート王妃音楽院で、チェロ・ソナタ全5曲を一晩で弾ききった公演映像です。</p> <p>チェロのゲイリー・ホフマンは、欧米で高い評価を得ているカナダ出身の奏者。1986年にはバリのロストロポヴィチ国際チェロ・コンクールで優勝するなど、華々しい経歴をもつ名手です。しかし彼は技巧をひけらかすことなく、地道に作品と楽器と向き合い、堅実に誠実に演奏活動を続けてきました。そのことはこのベートーヴェンでもよくわかります。ピアノのデイヴィッド・セリグはオーストラリア出身、やはり欧米で堅実な活動を繰り返して、ホフマンと共に録音も残しています。気心知れた二人のデュオはほとんど対話という趣で、アマティのチェロとベーゼンドルファーのピアノのきめ細かく深い音色がその空気をさらに深めます。彼らの名技は冴え、技術的には完璧に近く、ライヴらしい熱気も十分ですが、最後に印象に残るのは丁寧さと誠実さ。デュオの理想的な姿のひとつと言えるでしょう。技巧を前面に出す派手な演奏ではなく、じっくり聴きこめる演奏で楽聖のチェロ・ソナタの深みを味わいたい方にこそお薦めの映像です。</p> <p>40代半ばの1815年に作られた第4番と第5番は、2曲セットでの作品番号op.102が与えられ、いわゆる後期作品の入り口と言えるような独自の境地を示しています。第4番は最初に後期独特の作風である瞑想的な序奏があり、主部は中期のような力強い音楽になるという、中後期両面の魅力が混じった15分ほどのユニークな1曲。一筋縄ではいかない作品ですが、ホフマンとセリグはこともなげに場面ごとのキャラクターの違いを巧みに弾き分けていて、ベテランならではの見事な演奏で楽しませてくれます。</p> <p>【演目】 ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン：チェロ・ソナタ第4番 八長調 Op.102-1 【演奏】 ゲイリー・ホフマン（チェロ）、デイヴィッド・セリグ（ピアノ） 【収録】 2019年5月2日 エリザベート王妃音楽院(ワテルロー) 【映像監督】 フレデリック・デレスク ■約17分</p>                           |
| ホフマン&セリグ『ベートーヴェン：チェロ・ソナタ第5番』 | 1,1,3,3,6,6,12,12     | チェロのゲイリー・ホフマンが、一晩でベートーヴェンのチェロ・ソナタ全曲に挑む。誠実で緻密な解釈で、懐深い名演を実現。最後の第5番で穏やかな感動を味わう。 | <p>2020年はベートーヴェン生誕250周年のアニバーサリーで、多くのベートーヴェン演奏、録音、録画に触れられるはず。その中でも渋い存在感を放つ番組が、2019年5月、ベルギーのエリザベート王妃音楽院で、チェロ・ソナタ全5曲を一晩で弾ききった公演映像です。</p> <p>チェロのゲイリー・ホフマンは、欧米で高い評価を得ているカナダ出身の奏者。1986年にはバリのロストロポヴィチ国際チェロ・コンクールで優勝するなど、華々しい経歴をもつ名手です。しかし彼は技巧をひけらかすことなく、地道に作品と楽器と向き合い、堅実に誠実に演奏活動を続けてきました。そのことはこのベートーヴェンでもよくわかります。ピアノのデイヴィッド・セリグはオーストラリア出身、やはり欧米で堅実な活動を繰り返して、ホフマンと共に録音も残しています。気心知れた二人のデュオはほとんど対話という趣で、アマティのチェロとベーゼンドルファーのピアノのきめ細かく深い音色がその空気をさらに深めます。彼らの名技は冴え、技術的には完璧に近く、ライヴらしい熱気も十分ですが、最後に印象に残るのは丁寧さと誠実さ。デュオの理想的な姿のひとつと言えるでしょう。技巧を前面に出す派手な演奏ではなく、じっくり聴きこめる演奏で楽聖のチェロ・ソナタの深みを味わいたい方にこそお薦めの映像です。</p> <p>40代半ばの1815年に2曲セットで作られた第4番と第5番。第5番は3楽章形式、二長調の明るい響きをもちながら、第3番と比べると肩の力が抜けた趣もあります。後期の深い境地を示した感傷的な第2楽章に、フーガによる第3楽章と、様式的にも多様性を増しています。ホフマンとセリグは核心となる中間楽章をじっくりと、穏やかに、深く表現。ベテランならではの静かな感動を実現することで、自ずと前後の楽章の生命力も際立ちます。気持ちのこもった最終音の後、1公演で一気に全5曲を弾ききった二人はやっと表情を崩して抱擁し、すてきな一夜を終えます。</p> <p>【演目】 ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン：チェロ・ソナタ第5番 二長調 Op.102-2 【演奏】 ゲイリー・ホフマン（チェロ）、デイヴィッド・セリグ（ピアノ） 【収録】 2019年5月2日 エリザベート王妃音楽院(ワテルロー) 【映像監督】 フレデリック・デレスク ■約25分</p> |
| ショルティ&シカゴ響『ベートーヴェン：交響曲第1番』   | 20,20,23,23,31,31,0,0 | サー・ゲオルグ・ショルティと手兵シカゴ交響楽団が、1978年にロンドンでベートーヴェンを披露。懐かしいスタイルの重厚な交響曲第1番を堪能。        | <p>20世紀を代表する指揮者のひとりで、1997年に亡くなったサー・ゲオルグ・ショルティ(1912-1997)。数多くの録音でも独特のテンションと重量感による名演奏を聴かせた巨匠です。中でも長く音楽監督を務めたシカゴ交響楽団との録音では、指揮者とオーケストラの個性の相乗効果で、密度の高いバワルな演奏を聴かせました。</p> <p>本映像は1978年、ロンドンのロイヤル・アルバート・ホールに彼らが客演した際のもの。1階土間の客席が取られて聴衆がひしめくように立っている様子から、プロムス音楽祭の公演のようです。それはチューニングの際、オーボエが「ラ(A)」の音を吹いたとき、なんと客席も「ア～」と歌い始めるというだけの様子からもわかります。今のプロムスではあまり見かけないことで、時代を感じさせる光景です。他にも、ショルティは下手(しもて)側から登場し、指揮台の位置も舞台からはみ出る形で作られるなど、今とは違う様子も確認できます。</p> <p>曲はベートーヴェンの交響曲第1番。ショルティの指揮ぶりは独特の力強いものです。しかも強さ一辺倒ではなく、豪快な一方で繊細さもあり、ニュアンス豊かでありながらスケール感も十分と、改めて見ると巨匠の深い芸がわかります。当時らしいスタイルのベートーヴェンですが、重厚かつしなやかな音色による構築がすばらしく、今なお楽しめる好演です。シカゴ響は高い技術はもちろんのこと、先述のような会場の雰囲気にもまったくおもねらず、硬い表情のままの演奏姿には思わずニヤリとさせられます。</p> <p>【演目】 ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン：交響曲第1番 八長調 Op.21<br/> 【指揮】 サー・ゲオルグ・ショルティ 【演奏】 シカゴ交響楽団 【収録】 1978年 ロイヤル・アルバート・ホール（ロンドン）<br/> 【映像監督】 ハンフリー・バートン ■約34分</p>   |

| 番組名                                | 放送日                     | 概要  | 曲目、出演者等  |
|------------------------------------|-------------------------|---|--|
| BBCプロムス2018「バルヴィ&ブニアティシヴィリ」        | 13,13,15,15,18,18,26,26 | 2018年プロムスにエストニア・フェスティバル管が初登場。パーヴォ・ヤルヴィの熱い指揮のもと、北欧の名作を聴かせる。ブニアティシヴィリのグリーグの熟演も。 | <p>エストニアの独立100周年だった2018年、ロンドンの音楽祭「プロムス」にエストニア・フェスティバル管弦楽団が初登場しました。エストニア、ノルウェー、フィンランドの大作作曲家たちの名作を取り上げる「フルディック・ナイト」で、指揮は同団の創設者にして音楽監督のパーヴォ・ヤルヴィ。2011年に活動を開始したばかりのオーケストラで、記念年の18年にはヨーロッパ・ツアーを敢行、プロムス公演はそのハイライトとなるものです。</p> <p>最初は母国エストニアのアルヴォ・ペルトの交響曲第3番。1971年作、パーヴォの父である名指揮者ネーメ・ヤルヴィに捧げられた作品で、後のペルトの作風とは一味違う力強さと美しさをもちます。息子のパーヴォが共感あふれる演奏を聴かせ、終演後はペルト自身も舞台上に立ち、熱烈な拍手に応えます。</p> <p>次はノルウェーのグリーグのピアノ協奏曲。ジョージア出身の人気ピアニスト、カティア・ブニアティシヴィリはパーヴォとの共演が多く、世界各地で気心知れた闊達な演奏を聴かせています。この公演もハイテンションで凄まじいテクニックを披露、パーヴォと共に名作の熟演を作り上げます。アンコールは一転してドビュッシー「月の光」で繊細な美音を。</p> <p>メインはシベリウスの交響曲第5番。シベリウスが愛したフィンランドの自然、風景が眼前に浮かんでくるような名作です。パーヴォはオーケストラの意欲をフルに引き出し、隠れがちな音の強調も辞さず、彼ならではの熱いシベリウスを存分に展開。すばらしいシベリウスの後のアンコールは、エストニアの作曲家レボ・スメラの映画音楽から、クラリネットやヴァイオリンなどソロ楽器が活躍するムーディーな一品を。さらに、彼らの定番曲のひとつ、スウェーデンのアルヴェーン「羊飼いの娘の踊り」を楽しみ聴かせて、ロイヤル・アルバート・ホールでの聴衆を沸かせます。</p> <p>【演目】<br/>アルヴォ・ペルト：交響曲第3番<br/>エドヴァルト・グリーグ：ピアノ協奏曲イ短調Op.16<br/>【ソリストアンコール】クロード・ドビュッシー：月の光 ジャン・シベリウス：交響曲第5番変ホ長調Op.82<br/>【アンコール】レボ・スメラ：スプリング・フライ、ヒューゴ・アルヴェーン：「羊飼いの娘の踊り」<br/>【指揮】 パーヴォ・ヤルヴィ 【演奏】 エストニア・フェスティバル管弦楽団、カティア・ブニアティシヴィリ（ピアノ）<br/>【収録】 2018年8月13日 ロイヤル・アルバート・ホール（ロンドン） 【映像監督】 ジョナサン・ハズウェル ■ 約1時間53分</p>  |
| ハンボイム&ウィーン・フィル定期公演2017「アルゲリッチを迎えて」 | 8,8,13,13,17,17,30,30   | 新たな伝説が生まれた瞬間を見逃すな！アルゲリッチとウィーン・フィルが歴史的な初共演。圧巻のピアノにオーケストラも熱く呼应。火花散る名演が生まれた！     | <p>1941年生まれのマルタ・アルゲリッチと1942年生まれのダニエル・ハンボイムは、ともにブエノスアイレス出身の親友です。二人は2014年に15年ぶりにピアノ・デュオを組んで以来、頻繁に共演していますが、その余勢をかって、ついに念願のビッグ・ブランチが実現しました。アルゲリッチが初めてウィーン・フィルと共演したのです。指揮はもちろんハンボイム。記念すべき歴史的コンサートの模様をたっぷりご覧ください。</p> <p>これまでアルゲリッチがウィーン・フィルと共演していなかったのは、女性楽員を雇用していないウィーン・フィルとの共演をアルゲリッチが拒んでいたからだと言われています。たしかに、ウィーン・フィルが初めて女性楽員を迎え入れたのは1990年代後半になってからのことでした。しかしご存知のように、当コンサートでもコンサートミストレスを務めているアルベナ・ダナイロヴァを筆頭に女性楽員の数も増え、現在では楽員の約1割が女性となっています。この日の初共演が、もちろんハンボイムが橋渡し役になって実現したものであろうことは容易に想像がつかます。</p> <p>記念すべきコンサートにアルゲリッチが選んだのはフランツ・リストのピアノ協奏曲第1番。収録当時76歳のアルゲリッチが旺盛な演奏を聴かせます。ダイナミックで痛快なタッチ。オーケストラもそれにこたえて、ウィーン・フィルらしくらぬアグレッシブな熟演が繰り広げられています。これは名演！</p> <p>面白いのはトリアングル奏者の座り位置。この協奏曲は、第3楽章で登場するトリアングルがあまりに印象的なこともあって、「トリアングル協奏曲」などと揶揄されることもあるのですが、それを逆手にとって、トリアングル奏者を最前列、第1ヴァイオリンの隣に座らせるという趣向。まさに協奏曲のリストのようで、演奏後もトリアングル奏者がアルゲリッチ、ハンボイムと手を繋いで拍手にこたえています。</p> <p>コンサート後半、ハンボイムは、この十数年来、慎重にじっくりと取り組んでいるグスタフ・マーラーの交響曲第7番を取り上げました。ウィーン・フィルからじつに重々しく深い響きを引き出した、こちらも名演です。</p> <p>【演奏】<br/>ダニエル・ハンボイム（指揮）ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団マルタ・アルゲリッチ（ピアノ）<br/>【曲目】 フランツ・リスト：ピアノ協奏曲第1番変ホ長調S.124 / R.455<br/>グスタフ・マーラー：交響曲第7番ホ短調『夜の歌』<br/>【収録】 2017年11月、ウィーン楽友協会大ホール 【映像監督】 ディック・カイス ■ 約1時間46分</p>   |
| バーンスタイン&ウィーン・フィル『ベートーヴェン：交響曲第4番』   | 20,20,23,23,31,31,0,0   | バーンスタインとウィーン・フィルの不滅のベートーヴェン・ライブ。指揮者・オーケストラが一体となり、生き生きとしたエネルギーに溢れた幸せな記録！       | <p>1970年代にレナード・バーンスタインがウィーン・フィルハーモニー管弦楽団と録音したライブ録音によるベートーヴェンの交響曲全集。1980年のレコード・アカデミー賞大賞にも輝いた名盤で、20世紀のレコード史の金字塔といえる貴重な音楽遺産ですが、じつはそのコンサートはフィルム収録のためのライブ・セッションとして行なわれたプロジェクトでした。つまり録音よりはむしろ、映像収録に重きが置かれていたのです。今回番組では、その映像による全集の中から、交響曲第4番の映像をお届けします。</p> <p>1970年代にバーンスタインが最も密接な関係を築いていたオーケストラはウィーン・フィルです。バーンスタインのウィーン初登場は、1966年の国立歌劇場での『ファルスタッフ』（ワーグナー）でした。そして1969年にはニューヨーク・フィルの音楽監督を辞任して、いよいよウィーン・フィルとの蜜月が本格化します。</p> <p>このベートーヴェンの交響曲第4番は、1807年にウィーンで初演されました。すでにスケッチに着手していた第5番『運命』を中断して、先にこちらを完成させたことが知られています。のちにシューマンが「（第3番『英雄』と第5番『運命』という）北欧の巨人に挟まれたギリシャの乙女」と評したエピソードは有名です。前作の第3番『英雄』よりも小さな編成ということもあり、シューマンの言葉はこの作品の穏やかで控えめな佇まいの象徴として語られることが多いのですが、バーンスタインの音楽には、控えめどころか、精気がみなぎっているように感じます。映像が収録されたのは1978年11月。バーンスタインはこの年の6月に妻フレシアを肺がんで失い、大きなショックを受けていました。そう思っただけで映像を見ると、彼の表情に寂しさを感じなくもないのですが、その演奏には、「苦悩を突き抜けて歓喜へ」という、ベートーヴェン的なモットーを彷彿させるエネルギーが溢れ出ているのです。第1楽章冒頭、アダージョの序奏からアレグロ・ヴィヴァーチェの主部へ突入する瞬間など、まさにその好例です。奏者たちがバーンスタインに共感して演奏する姿も見てとれて、画面の前の私たちもまた、彼らとともに音楽を共有する喜びに浸ることができる秀演です。</p> <p>映像監督は、バーンスタインの30年来の友人のTVプロデューサーで、のちにバーンスタインの伝記も著したハンフリー・パートン。演奏を終え、充実した表情で聴衆の拍手にこたえるバーンスタインの様子を見てると、このまいつまでもこの余韻に浸っていたいという欲求にかられる、じつに幸せな映像です。</p> <p>【演目】 ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン：交響曲第4番変ロ長調Op.60<br/>【指揮】 レナード・バーンスタイン 【管弦楽】 ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団<br/>【収録】 1978年10-11月、ウィーン楽友協会大ホール（ライヴ） 【録音ディレクター】 ジョン・マクラーア 【映像監督】 ハンフリー・パートン ■ 約40分</p> |

| 番組名                               | 放送日                   | 概要  | 曲目、出演者等  |
|-----------------------------------|-----------------------|---|--|
| カラヤン&ベルリン・フィル『ベートーヴェン：運命』1966年製作版 | 20,20,23,23,31,31,0,0 | 帝王カラヤンが最初に挑んだ「映像のベートーヴェン」。フランスの巨匠クルーゾーの映像表現が光る20世紀の音楽遺産。1966年制作のモノクロ映像は画質も鮮明。 | <p>ヘルベルト・フォン・カラヤン（1908～1989）は生涯に4度のベートーヴェン交響曲全集のレコード録音を完成させましたが、一方で「帝王」は映像の可能性にもいち早く着目していました。1960～70年代と1980年代の2度にわたって、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団との映像によるベートーヴェン交響曲全集を制作しているものあられですが、今回お届けするのは、その全集の「前ぶれ」ともいえるべき、モノクロ映像／モノラル音声で収録された交響曲第5番『運命』です。</p> <p>カラヤンの先端技術への強い関心はよく知られています。1965年、カラヤンは映像制作会社「コスモテル」を設立。完璧主義者のカラヤンは、未経験のジャンルの仕事を始めるために、『犯罪河岸』などで知られるフランスの著名な映画監督アンリ＝ジョルジュ・クルーゾーを招き協力を仰ぎました。より巨大なマーケットであるポップ・ミュージックの世界でさえ、ミュージック・ビデオの制作が本格化するのは1980年代に入ってから。積極的な映像の活用は、カラヤンの先見性のあられです。じつはカラヤンが最初に映像の有用性を実感したのは、1957年にベルリン・フィルとの初来日の際（一説には1959年のウィーン・フィルとの初来日）、NHKによるコンサートの録画中継を食い入るよう見つめる日本人の姿だったといわれています。われわれ日本人が、クラシック音楽の現代史にひと役買ったのです。</p> <p>クルーゾーとともに1966年に制作したこの『運命』は、シューマンの交響曲第4番やモーツァルトのヴァイオリン協奏曲第5番『トルコ風』（独奏＝メヌーイン）、ドヴォルザークの交響曲第9番『新世界より』、そしてヴェルディ『レクイエム』とともに、『指揮の芸術』という全5本の映像作品シリーズの一環でした。このシリーズでカラヤンは、リハーサル風景や音楽評論家との対話など、のちの自身の映像作品群とは少し異なる視点からも、映像の可能性をさまざまに試みています。単なる演奏風景の鑑賞フィルムではなく、音楽を作る指揮者やオーケストラ団員そのものの仕事に視聴者の視線を導いていたのです。</p> <p>もちろん演奏そのものも雄弁です。いつものように目をつむったまま指揮をする、ポロシャツ姿のカラヤンは当時57歳。じつにスタイリッシュに、オーケストラからデリケートな表情を引き出して、1970年代の全盛期に向かうカラヤン&amp;ベルリン・フィルの実力を見せつけています。カメラの画角に合わせて弦楽器セクションを横方向に長く並べた映像用のオーケストラ配置や、指揮者カメラの多用など、カラヤンの映像作品でおなじみの手法はここでもすでに使われていますが、後年に自ら演出した作品に比べるとそれはかなり自然で、見ていて違和感がありません。モノクロ映像ながら画質は鮮明で、モノクロ末期の技術の円熟ぶりも感じられます。</p> <p>【曲目】 ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン：交響曲第5番ハ短調Op.67『運命』<br/> 【指揮】 ヘルベルト・フォン・カラヤン 【管弦楽】 ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団<br/> 【収録】 1966年1、2月、ユニオン・スタジオ・アトリエ、ベルリン 【映像監督】 アンリ＝ジョルジュ・クルーゾー ■約32分</p> |
| BBCプロムス2016「グラジニエ＝ティエラ&ハンニガン」     | 6,6,9,9,11,11,19,19   | 人気指揮者グラジニエ＝ティエラが、バーミンガム市響の音楽監督就任直前にプロムスに登場。ハンニガンの歌唱と共に、ロンドンの聴衆を湧かせる。          | <p>1986年リトアニア生まれの指揮者ミルガ・グラジニエ＝ティエラは、20代にして頭角を現し、2016年9月からはバーミンガム市交響楽団の音楽監督を務めています。このプロムス公演は、正式就任直前に同コンビでロンドンに登場、顔見世という以上の注目を集めました。</p> <p>1920年創設のバーミンガム市響といえは、かつてサイモン・ラトルが長く監督を務めたほか、近年もアンドリス・ネルソンスなど、若い才能を見つけて抜擢することでも知られています。そのネルソンスの後任として、初の女性音楽監督に指名されたのがグラジニエ＝ティエラ。エネルギーあふれる表現と豊かな表情が印象的で、このステージでも早くもオーケストラと聴衆を引き込んでいます。</p> <p>最初のモーツァルト『魔笛』序曲から、ヴァイオリンが対面する対向配置のピリオド・アプローチでヴィブラートを抑制、強烈なアタックで、笑顔でオケをドライブしています。続いては現代作品で、ハンス・アブラハムセンの「レット・ミー・テル・ユー」では、現代ものを得意とする最高峰のソプラノ歌手バーバラ・ハンニガンが共演。ハンニガンは暗譜で、その超絶歌唱の安定感と美しさは、さすがとしか言いようのない水準。技巧を駆使しながら、全体的には室内楽的で穏やか、最後は弱音に消えゆく、30分以上の大作です。</p> <p>メインはチャイコフスキーの交響曲第4番で、オケはチェロが外側になる通常配置に。ロマンティックなスタイルでオケのパワーも解放しますが、かみのないしなやかな指揮ぶり、テンポ変化も自在、独特の世界を作り上げています。そして、この日の見どころはアンコール曲が華々しく終わった瞬間！くると客席に振り向いてひと声、「バーミンガムで会いましょう！！」。聴衆も楽員も大笑い。一瞬で会場の心をつかんでしまう、生粋の指揮者の天分を見せつけます。</p> <p>【曲目】<br/> ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト：歌劇『魔笛』K. 620から序曲<br/> ハンス・アブラハムセン：「レット・ミー・テル・ユー」（作詞：ポール・グリフィス）（ロンドン初演）ヒョートル・イリイチ・チャイコフスキー：交響曲第4番 ハ短調Op. 36 ヒョートル・イリイチ・チャイコフスキー：バレエ音楽『眠りの森の美女』Op. 66から「ダイヤモンドの精の踊りとコーダ」<br/> 【指揮】 ミルガ・グラジニエ＝ティエラ 【演奏】 バーミンガム市交響楽団、バーバラ・ハンニガン（ソプラノ）<br/> 【収録】 2016年8月27日 ロイヤル・アルバート・ホール 【映像監督】 バティ・マー ■約1時間39分</p>   |

| 番組名                                 | 放送日                     | 概要   | 曲目、出演者等  |
|-------------------------------------|-------------------------|--|--|
| BBCプロムス2018「カネキス&アリサ・ワイラースタイン」      | 6,6,9,9,11,11,19,19     | ライジング・スター & BBC響のしなやかな演奏によってプロムスに映える、20世紀ロシアの代表曲 & 若き俊才の新曲             | <p>ロンドンの夏の風物詩、BBCプロムスにおいて注目の女性ライジング・スター、カーナ・カネキスがBBC交響楽団を指揮した公演を当番組でお送りします。前半はショスタコーヴィチ、後半はラフマニノフと、対照的な20世紀ロシアのオーケストラ作品を聴く醍醐味とともに、その前に1曲ずつ小品を置いてのプログラムです。</p> <p>冒頭のベートーヴェンの序曲『コリオラン』では、気迫に満ちたフォルテの一撃から駆り立てられるパセティックなドラマを、緊張を途切らせないまま透明な響きでしなやかに表現。当コンドの長所が感じられます。</p> <p>続くショスタコーヴィチのチェロ協奏曲第1番では、若手チェリストの中でも注目株で家族が皆演奏家というサラブレッド、アリサ・ワイラースタインの登場です。シニカルな両端楽章ではおどらかな音楽性と無類の超絶技巧、そして精確に音を統御しようとする指揮 &amp; オーケストラとのやりとりが実にスリリング。白眉は魂の淵を歩むような幽玄な第2楽章で、チェロの心に沁みる透徹した歌いっぷりと、それを包み込むオケの幻想的な響きが強い印象を残します。</p> <p>後半1曲目は、カリフォルニア出身の若き作曲家アンドリュー・ノーマンの「スパイラル」。大指揮者ラルのベルリン・フィルとの告別コンサートのために、同フィルとBBCプロムスが共同委嘱した5分ほどの曲で、プロムスではこの日が初演です。静寂から色々な楽器の音が次第に重なり合い、ラヴェル『ボレロ』のようにだんだんと強くなっていき、残像のように聴こえる音響が最高潮に達した後は再び静寂が……といった構成に、現代曲の得意なBBC響が牙えを見せます。</p> <p>最後はラフマニノフが晩年のアメリカ時代、フィラデルフィア管のために書いた最後の作品「交響的舞曲」。ここでは、野性的な荒々しさや原色の色彩よりも、引き締まった精緻な迫力のうちに、しなやかで優しい抒情が浮かび上がる洗練された演奏になっています。カネキスの耳、知性的なコントロールの牙えとオケの機能性がマッチして細部まで美しく、彼女が翌年のプロムス・ファーストナイトで再登場することに納得させられることでしょう。</p> <p>[曲目]<br/>           ベートーヴェン：序曲『コリオラン』Op.62 ショスタコーヴィチ：チェロ協奏曲第1番 変ホ長調Op.107<br/>           J.S.バッハ：無伴奏チェロ組曲第4番 変ホ長調BWV1010からサラバンド（リスト・アンコール）<br/>           アンドリュー・ノーマン：スパイラル（ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団／BBCプロムス共同委嘱作品）ラフマニノフ：交響的舞曲Op.45<br/>           [指揮] カーナ・カネキス [演奏] アリサ・ワイラースタイン（チェロ）、BBC交響楽団<br/>           [収録]2018年7月23日 ロンドン、ロイヤル・アルバートホール[監督]ケリー・クラーク■約1時間31分</p> |
| BBCプロムス2018「イヴァン・フィッシャー & ブダペスト祝祭管」 | 13,13,15,15,18,18,26,26 | ハンガリーの演奏家たちによるプロムス「ハンガリー・ナイト」。ツインパロンやジプシー・ヴァイオリンも登場。アンコールの歌うオーケストラは必見！ | <p>19世紀ハンガリーで流行していた「ジプシー音楽」は、リストやブラームスらがその旋律を題材に多くの作品を作り、「チャールダーシュ」といった舞曲が外国で流行するなど、ひとつの潮流になりました。ハンガリー人にとっても自らの血脈として受け継がれていることが、この2018年プロムスのコンサートでもわかります。ハンガリーの名指揮者イヴァン・フィッシャーとブダペスト祝祭管弦楽団が客演して、本場のツインパロンやジプシー・ヴァイオリン奏者と共に、ロイヤル・アルバート・ホールの聴衆を湧かせました。</p> <p>まず指揮者の案内でツインパロン奏者イェヌー・リストシュの紹介と即興演奏から始まり、ツインパロン入りのリスト「ハンガリー狂詩曲第1番」で、濃厚な情緒を聴かせます。続いて同国ジプシー・ヴァイオリンの大家ヨーゼフ・レンドヴァイが登場し、ブラームス「ハンガリー舞曲第1番」とリスト「同狂詩曲第3番」で共演。さらに、息子のヨーゼフ・レンドヴァイ・ジュニアが登場、父親の前で「ツイゴイネルワイゼン」とバガニーニのソロンクールを披露。そして父子共演でのブラームス「同舞曲第11番」で、ハンガリー情趣あふれる前半を締めます。</p> <p>後半は、ハンガリー音楽を愛したブラームスの交響曲第1番です。序奏の弦のフレージングからやや独特で、懐かしいアゴーギクも随所で見せる、名匠フィッシャーならではの堂々たる演奏です。プロムスらしく第1、第2楽章後には拍手が入ります。</p> <p>今回最大のハイライトは、最後のアンコールの「ハンガリー舞曲第4番」かもしれません。この旋律は同国の民謡歌でもあり、なんとオーケストラ楽員が歌って曲にしています。主部も中間部も歌と演奏で成立、懐かしうに歌う様は胸に迫ります。自分たちの歌と大作曲家の幸福な出会いを、いま体験できるのです。</p> <p>[曲目]<br/>           フランツ・リスト：ハンガリー狂詩曲第1番嬰ハ短調 ヨハネス・ブラームス：ハンガリー舞曲第1番ト短調<br/>           フランツ・リスト：ハンガリー狂詩曲第3番変ロ長調 バプロ・デ・サラサーテ：ツイゴイネルワイゼンOp.20<br/>           ニコロ・パガニーニ：「ネル・コル・ピウの主題による序奏と変奏曲」より ヨハネス・ブラームス：ハンガリー舞曲第11番ニ短調<br/>           ヨハネス・ブラームス：交響曲第1番ハ短調Op.68 ヨハネス・ブラームス：ハンガリー舞曲第4番ヘ短調<br/>           [指揮] イヴァン・フィッシャー [演奏] ブダペスト祝祭管弦楽団 ヨーゼフ・レンドヴァイ、ヨーゼフ・レンドヴァイ・ジュニア（ヴァイオリン）イェヌー・リストシュ（ツインパロン）<br/>           [収録] 2018年8月23日 ロンドン、ロイヤル・アルバート・ホール [映像監督] クリス・ルスマン■約1時間40分</p>                                  |

| 番組名                          | 放送日                     | 概要  | 曲目、出演者等  |
|------------------------------|-------------------------|---|--|
| BBCプロムス2019「ボヘミアン・ラブソディ」     | 13,13,15,15,18,18,26,26 | これぞ本家「ボヘミアン・ラブソディ」！英国の老舗音楽祭に登場した、注目のチェコの俊英指揮者によるチェコ音楽の名曲プログラム。ジョシュア・ベルの爽演に嘆息。 | <p>最終日「ラスト・ナイト」の凄まじい熱狂ぶりが日本でも放送されておなじみの「BBCプロムス」（プロムナード・コンサート）は、夏のロンドンを彩る音楽の風物詩。7月中旬から9月中旬までの期間中、100を超えるコンサート、イベントが開催される世界最大級の音楽祭です。創始者ヘンリー・ウッド卿（1869～1944）の生誕150年だった2019年には、初めて日本でも開催されたのも記憶に新しいところ。</p> <p>番組は、その2019年7月に、メイン会場のロイヤル・アルバート・ホールで行なわれた「ボヘミアン・ラブソディ」の模様です。ロンドンの音楽祭でこのタイトルを開けば、2018年公開の伝記映画も大ヒットした英国ロック・バンド「クイーン」を連想せずにはいられません。しかしプロムスは、その期待（？）を見事に裏切り、当コンサートは、クイーンの100年前、「ボヘミア」の語源であるチェコで活躍した二人の大作作曲家、アントニン・ドヴォルザークのヴァイオリン協奏曲と、ベドルジフ・スメタナの『わが祖国』というチェコ音楽プログラムです。そして指揮台も、チェコの注目指揮者ヤクブ・フルシャ。2010年から2018年まで東京都交響楽団の首席客演指揮者のポストを持っていたので、日本のファンにおなじみでしょう。現在首席指揮者を務めるハンベルク交響曲楽団を率いての演奏です。</p> <p>ドヴォルザークのヴァイオリン協奏曲は、ブラームスとの交流が始まり、国際的な名声を築き始めた頃の作品。この協奏曲も、ブラームスの盟友ヨーゼフ・ヨアヒムの勧めで書かれ、彼に献呈されています。独奏者はジョシュア・ベル。10～20代からつねにクラシック・シーンの最前線で活躍してきた彼も、もう51歳（コンサート当時）の大ヴェテラン。音楽の流れを俯瞰した、自然な息づかい、流麗なゆったりとした音楽づくりに、思わず前のめりに聴き入らずにはいられません。ソリスト・アンコールで弾いているドヴォルザークの三重奏曲「ミアアチュール」も、しびれる名曲。</p> <p>「ヴァルツヴァ（モルガウ）」が有名なスメタナの『わが祖国』は、祖国チェコの自然と伝説を音で編んだ連作交響詩。この曲を作曲した50歳前後から、スメタナは聴覚を失っていききました。各曲のタイトルは（第4曲を除いて）チェコの地名です。ここでは、フルシャのタクトが光ります。メリハリのある振幅の豊かな運びながら、つねにやわらかく暖かい響きが、なんとも心地よい演奏。それは弦管ともにこのオーケストラの持つ伝統的な音色でもあり同時に、フルシャ自身の音楽のあり方でもあることが、彼の柔軟なバトン・テクニクからも感じられます。また、演奏者たちの表情からは両者の信頼関係もひしひしと伝わってきて、1981年生まれのフルシャが、間違いなく同世代の指揮者界を牽引するトップランナーであることがよく理解できる、うれしいライブ映像です。コンサートではしばしばあるように、『わが祖国』の1曲ごとに盛大な拍手が来るのは、幅広い層の聴衆が詰めかけるプロムスならなおさらといったところですが、この曲が6楽章の交響曲ではなく、1曲ずつが独立した6曲からなる「連作」であることにも、あらためて思い至ります。</p> <p>スメタナ『売られた花嫁』からの2曲をアンコールし、盛んな歓声が飛び客席に満面の笑顔で答えるフルシャとオーケストラ。満足感があふれる、充実のライブです。</p> <p>【曲目】 アントニン・ドヴォルザーク：ヴァイオリン協奏曲イ短調Op.53 アントニン・ドヴォルザーク：弦楽三重奏のためのミアアチュール作品Op.75aより第1曲カヴァティーナ（ソリスト・アンコール） ベドルジハ・スメタナ：6つの連作交響詩『わが祖国』全曲 第1曲「ヴィエフラド（高い城）」、第2曲「ヴァルツヴァ」、第3曲「シャルカ」、第4曲「ボヘミアの森と草原より」、第5曲「ターボル」、第6曲「プラニーク」ベドルジフ・スメタナ：歌劇『売られた花嫁』よりボルカ、フリアント（アンコール）</p> <p>【指揮】 ヤクブ・フルシャ 【ヴァイオリン】 ジョシュア・ベル、バート・ヴァンデンボゲルデ（コンサートマスター） * 【ヴァイオラ】 ロイス・ランズバーク（首席奏者） * 【管弦楽】 ハンベルク交響楽団 * = ソリスト・アンコール</p> |
| バーンスタイン&ウィーン・フィル『ベートーヴェン：田園』 | 20,20,23,23,31,31,0,0   | バーンスタインとウィーン・フィルとの不滅のベートーヴェン全集のなかでも特筆すべき、至高の『田園』。40年たった現在も色あせない、20世紀の音楽遺産。    | <p>レコード・ファンの記憶に深く刻まれている名盤のひとつは、1980年のレコード・アカデミー賞大賞を受賞したレナード・バーンスタインとウィーン・フィルハーモニー管弦楽団によるベートーヴェン交響曲全集ではないでしょうか。ライブ収録で収録されたこの全集には、並行してユニテル社が収録した映像も残されています。名盤を、耳だけでなく目でも楽しめるうれしい映像。番組は、その全集のなかから、1978年11月、交響曲第6番『田園』を演奏した公演の模様です。</p> <p>1969年にニューヨーク・フィルの音楽監督を辞任したバーンスタインが、ヨーロッパでの活動を本格化した1970年代は、いよいよ巨匠への階段を昇りつめていく、彼の活動の頂点といえる充実した時期でした。そしてその時期に、最も密接な関係を築いていたオーケストラがウィーン・フィルです。反ユダヤの傾向が根強いと言われていたウィーンで、しかし両者の信頼関係は不思議と感じるほど深いものでした。</p> <p>9曲のベートーヴェン交響曲全集には、その両者の蜜月ぶりが濃厚に詰め込まれているのですが、なかでもこの『田園』は、特筆すべき名演として定評があります。なんとも穏やかな、安らぎに満ちた演奏。「さあ、気楽に行こうぜ。一緒に、私たちのありのままをやてやろう！」と語りかけるようなバーンスタインの柔和な微笑みが、見る者の胸を熱くします。オーケストラを、あるいは聴衆を、恣意的にあおるような仕掛けやアプローチは一箇所もありません。すべてが自然。現代の感覚からすると、いくぶんゆつたりした速さも、まさにこのテンポしかありえないと思わせる説得力。まさに最高の『田園』。ベートーヴェンっていいなあ、心から思える至福の演奏です。そして静かに演奏が終わわり、熱心な、しかし落ち着いた心のこもった拍手を贈る聴衆。</p> <p>映像監督は、バーンスタインの30年来の友人のハンフリー・バートン。のちに詳細な伝記『バーンスタインの生涯』（青土社刊）も著したTVプロデューサーです。そして録音ディレクターはバーンスタインと200作以上の録音を残したCBSのジョン・マクルーア。バーンスタインが最も信頼するチームとのコラボレーションによる、20世紀の貴重な音楽遺産を、どうぞお見逃しなく。</p> <p>【演目】 ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン：交響曲第6番 へ長調 Op.68 『田園』 【指揮】 レナード・バーンスタイン 【管弦楽】 ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団 【収録】 1978年11月11日、ウィーン楽友協会大ホール（ライブ） 【録音ディレクター】 ジョン・マクルーア 【映像監督】 ハンフリー・バートン ■約50分</p>  |

| 番組名                                | 放送日                     | 概要   | 曲目、出演者等   |
|------------------------------------|-------------------------|--|---|
| パレンボイム & WEDO 2012『ベートーヴェン：交響曲第8番』 | 20,20,25,25,31,0,0,0    | おしゃれでスタイリッシュ！ WEDOの若き奏者たちが奏でる可憐なベートーヴェン。2012年ロンドン・オリンピックで湧くプロミスに架かった中東平和の希望の架け橋。       | <p>アルゼンチン出身のユダヤ人で、イスラエル国籍を持つ巨匠ダニエル・パレンボイム（1942～ ）が目下最も精力的に取り組んでいるプロジェクトがウエスト＝イースタン・ディヴァン管弦楽団（WEDO＝The West-Eastern Divan Orchestra）です。対立の続く中東地域の対話を、音楽の世界で実現する取り組み。五輪開催に湧いた2012年夏のロンドンのBBCプロミスでWEDOが行なったベートーヴェン交響曲全曲演奏会のなかから、交響曲第8番の演奏の模様をお届けします。1942年からロイヤル・アルバート・ホールで開催されるようになったプロミスで、ベートーヴェンの交響曲全曲演奏会が行なわれるのはこれが初めてでした。</p> <p>WEDOは、パレンボイムが1999年に、友人である/バレスチナ系米国人の文学研究家エドワード・サイド（1935～2003）とともにスタートさせました。オーケストラ名はゲーテの代表作のひとつ『西東詩集（West-Eastern Divan）』から採られています。メンバーは、イスラエルとパレスチナ出身の、10～40代の音楽家たち。争う国や地域の出身者たちが、隣同士同じ譜面台を覗いて一緒に演奏することで互いを理解し合えるはずだというのがパレンボイムの理想です。2016年にはこのオーケストラの発展形として、「パレンボイム＝サイド・アカデミー」がベルリンにオープンし、イスラエルとパレスチナの若者たち90人が、ともに学んでいます。</p> <p>2011年にはケルンでベートーヴェンの交響曲全集をライブ録音しているパレンボイムとWEDO。その1年後、プロミスでの全曲演奏会は、2012年7月に行なわれました。オリンピック開催を記念するプログラムで、『第九』が演奏された最終日7月27日は、オリンピックの開会式の当日でした。</p> <p>なんとも魅力的なベートーヴェンです。交響曲第7番と並行して作曲され、1814年に同じ演奏会で初演された交響曲第8番は、ベートーヴェンの交響曲のなかでは比較的目標たない存在かもしれませんが。演奏時間30分に満たない小規模な、古典的なたずまいの佳曲ですが、かつて前時代に戻った保守的な作風ではなく、非常に洗練された、可憐でスタイリッシュな作品です。そのスマートさを全開で楽しませてくれるのがパレンボイムとWEDO。若い奏者たちの自発性を引き出し、それと戯れるように指揮するパレンボイム。第1楽章の最後を、まったく振らずに終える棒のなんともおしゃれなこと！ 思わずため息が出るようなカッコ良さです。パレンボイムの次男マイケル・パレンボイムがコンサートマスターを務める若いオーケストラも、まさに全身全霊で巨匠に応えて、じつにあたかい気分させてくれる秀演です。</p> <p>【演目】 ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン：交響曲第8番 へ長調 Op.93<br/> 【指揮】 ダニエル・パレンボイム 【演奏】 ウェスト＝イースタン・ディヴァン管弦楽団<br/> 【収録】 2012年7月24日 ロンドン、ロイヤル・アルバート・ホール 【映像監督】 ロドニー・グリーンバーク ■約30分</p> |
| ザルツブルク音楽祭2020「パレンボイム ピアノ・リサイタル」    | 14,14,16,16,19,19,22,22 | コンサートデビューから70年を迎えたパレンボイムが、ピアニストとしてザルツブルク音楽祭に登場。「2020年」が反映されたベートーヴェンのソナタ第31番とディアベリ変奏曲を。 | <p>2020年、世界中が新型コロナウイルスの影響を受け、夏の風物詩だった多くの音楽祭が休止に追い込まれました。しかし、今年創立100年を迎えたザルツブルク音楽祭は、さまざまな制限の中で開催に至りました。その精神を象徴するかのような演奏会が、生誕250年のベートーヴェンの後期の作品による、ダニエル・パレンボイムのピアノ・リサイタルです。</p> <p>最初のソナタ第31番は庄巻の演奏。というのも、ここでパレンボイムがとった表現は、流麗とは無縁、どのメロディも訥々とした流れて、いびつになることも厭わず、あたかも苦しみをかかえながら歌っているかのよう。これは衰えではなく、パレンボイムによる、世界的な苦難に襲われた2020年の夏だからこそ心からの表現でしょう。ベートーヴェン後期の心からの満ちた名作。しかも「嘆きの歌」と書かれた場面をもつ第31番で、こんな表現の可能性があるとは。まさに音楽は生きている、時代を反映する。深く考えさせられる体験になることでしょ。</p> <p>次はディアベリ変奏曲。ディアベリの書いた主題の変奏という課題に取り組むうちに、膨大な変奏のインスピレーションが湧き出てしまった、特殊な大作です。パレンボイムは前の曲とは一転して、いたって安定した端正なスタイルで構築し、深みのある音色と表現で各変奏の持ち味を發揮していきます。楽しい変奏も小粋に、沈滞する場面はどこまでも深く、最後まで落ち着きをもって丹念な演奏を聴かせてくれます。</p> <p>そして、終演後には音楽祭からパレンボイムへのお祝いのステージに。パレンボイムは1950年8月19日にブノスアイレスで初のコンサートを行いました。すなわちこのステージはデビュー70年の日であり、そのお祝いと、音楽祭への貢献が称えられ、惜しめない拍手が送られます。</p> <p>【演目】<br/> ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第31番 変イ長調Op. 110 アンTON・ディアベリの主題による33の変奏曲 八長調Op. 120 【演奏】 ダニエル・パレンボイム（ピアノ）<br/> 【収録】 2020年8月19日 ザルツブルク祝祭大劇場 【映像監督】 エリーザベト・メルツァー ■約1時間38分</p>   |
| ザルツブルク音楽祭2020「ベルチャ四重奏団コンサート」       | 7,7,9,9,12,12,22,22     | 2020年に開催されたザルツブルク音楽祭にベルチャ四重奏団が登場し、ベートーヴェンのラズモフスキー第1番と第3番で世界最高峰の演奏を披露する。                | <p>2020年、世界中が新型コロナウイルスの影響を受け、多くの音楽祭が休止に追い込まれましたが、今年創立100年を迎えたザルツブルク音楽祭は、開催を実現しました。休憩なしなどの制限はありながらも、例年のように世界的な名演奏家が集まり、質沢な演奏会が連日開催されて、その規模が早くも放送されることとなりました。</p> <p>室内楽では、世界最高峰の四重奏団のひとつであるベルチャ弦楽四重奏団が登場。結成から26年目となる彼らが披露したのは、生誕250周年のベートーヴェンの名作です。彼らも演奏機会が激減していたので、このステージでは各メンバーもひととき思いのこもった表情で臨んでいます。ベルチャならではの強い表現意欲は変わりませんが、慈しむような落ち着きも感じられ、ライブ感満点の興奮と、心の深いところに届く情感が両立した演奏を聴かせてくれます。</p> <p>曲目は、ベートーヴェン中期の傑作集「ラズモフスキー四重奏曲集」から第3番と第1番で、その間に、新ウィーン楽派のウェーベルンがまだロマンティックな書法だった時期の美しい小品「緩徐楽章」がはさまれるプログラムです。ベートーヴェンでは、細部まで彫琢されながら、初めて弾くかのようなヴィヴィッドさも保たれていて、磨き抜かれたハーモニーや、わずかなアゴーギク、細かいアーティキュレーションも完全に共有される様はさすがの一言。両曲のフィナーレの熱い追い込みも見事で、興奮を誘います。ウェーベルンの甘美なロマンの表現もすばらしく、各人の長いメロディの濃密な歌は感動的で、4人の高い技術と音楽性が存分に發揮されます。思わず叫び声も出た拍手を受け、アンコールでは万感の「カヴァティーナ」、究極的な逸品で感動的に締めくくられます。</p> <p>【演目】<br/> ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン：弦楽四重奏曲第9番八長調Op.59-3『ラズモフスキー第3番』<br/> アントン・ウェーベルン：弦楽四重奏のための緩徐楽章 ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン：弦楽四重奏曲第7番へ長調Op.59-1『ラズモフスキー第1番』同：弦楽四重奏曲第13番変ロ長調Op.130より第5楽章「カヴァティーナ」<br/> 【演奏】 ベルチャ弦楽四重奏団 【収録】 2020年8月7日 モーツァルトのための劇場（旧ザルツブルク祝祭小劇場）<br/> 【映像監督】 ディック・カイス ■約1時間51分</p>   |

| 番組名                            | 放送日                  | 概要   | 曲目、出演者等  |
|--------------------------------|----------------------|--|--|
| ザルツブルク音楽祭2020「ホルトンのモーツァルト宗教曲集」 | 7,7,9,9,12,12,22,22  | モーツァルトの故郷で、古楽の名匠ホルトンの指揮による珍しい宗教曲を。コロナ禍でもほぼ通常に近い配置で歌う合唱団の様子も、非常に貴重なもの。    | <p>2020年、世界中が新型コロナウイルスの影響を受ける中、今年創立100年を迎えたザルツブルク音楽祭は開催を実現。モーツァルトの生地で、地元の名門モーツァルトテウム管弦楽団と、古楽を中心に活躍する名指揮者アイヴァー・ポルトンによる、モーツァルト・マチネが開催されました。ポルトンはかつて12年にわたり常任指揮者を務めていた同楽団とは気心知れた関係。この公演でも、ピリオドスタイルの奏法に、ナチュラル管の金管などを取り入れながら新鮮な響きを構築し、心に訴える演奏を作り上げました。ザルツブルク・バツハ合唱団、宗教曲に長じた4人の世界的ソリストたちの美声と共に、モーツァルトの珍しい宗教曲を聴かせてくれます。</p> <p>客席は間隔をあける中、舞台の出演者も多少間隔はあるものの、42人の合唱団が、2020年夏における合唱としては異例の距離感であり、目を引きまします。</p> <p>最初はミサ曲ハ短調K.139「孤児院ミサ」。なんと12歳のときの作品ですが、変化に富んだ魅力的な楽曲にあふれていて、トロンボーン3人が入った編成の処理も万全、ソリストと合唱の扱いもすでに手慣れたもの。モーツァルトの神重ぶりを痛感する天才的な大作を、ライブの高揚感も入り混じる名演奏で体験できます。</p> <p>次は30代の作品、弦楽四重奏のためのアダージョとフーガハ短調K.546を弦楽合奏で。モーツァルトのダークな側面と厳しくもエモーショナルな対位法を体験できる名品で、熱気にあふれる演奏が展開されます。</p> <p>最後はヴェスベレ（荘厳晩課）ハ長調 K.339。ザルツブルクを離れる前に書かれた作品で、管弦楽はヴィオラ抜き弦楽器にファゴットとオルガン、トランペット2人、ティンパニ、そしてトロンボーン3人という独特の編成。宗教曲とはいえ、トロンボーンの出番が多いのは、モーツァルトとしては貴重です。実演機会が稀少な作品を、理想的な演奏で体験できるマチネになりました。</p> <p>【演出】<br/>ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト：ミサ曲ハ短調K.139「孤児院ミサ」弦楽四重奏のためのアダージョとフーガハ短調<br/>ヴェスベレ（荘厳晩課）ハ長調K.339</p> <p>【指揮】 アイヴァー・ポルトン 【演奏】 ザルツブルク・モーツァルトテウム管弦楽団 ローザ・フェオーラ（ソプラノ）カタリーナ・マギエラ（コントラルト）セバスティアン・コールヘップ（テノール）ペーター・ケルナー（バス）ザルツブルク・バツハ合唱団（合唱指揮：ユヴァル・ウエインバーク）</p> <p>【収録】 2020年8月2日 モーツァルトのための劇場（旧ザルツブルク祝祭小劇場） 【映像監督】 ディック・カイス ■約1時間27分</p>                     |
| ウエルザー＝メスト&コンセルトヘボウ『ベートーヴェン：第九』 | 20,20,25,25,31,0,0,0 | コンセルトヘボウ恒例のクリスマスのマチネ公演。2019年はウエルザー＝メストの第九。鮮やかに突き進む颯爽とした推進力。合唱が特筆もの高レヴェル！ | <p>アムステルダム・コンセルトヘボウの毎年の恒例となっている、ロイヤル・コンセルトヘボウ管弦楽団によるクリスマスの午後のコンサート「クリスマス・マチネ」。2019年はフランツ・ウエルザー＝メストが登場して『第九』を演奏しました。</p> <p>オーストリア出身のウエルザー＝メストは、1990年代からロンドン・フィルハーモニー管弦楽団やチューリヒ歌劇場、クレーヴラ管弦楽団の音楽監督、そして母国のウィーン国立歌劇場の音楽総監督を歴任してきた、間違いなく世界のトップ指揮者の一人です。しかし意外なことに、オランダの名門ロイヤル・コンセルトヘボウ管弦楽団の指揮台に初めて登場したのはまさに最近のことで、2016年4月にモーツァルトのホルン協奏曲とブルクナーの交響曲第7番を指揮したのが同楽団へのデビューでした。その後もベートーヴェンの『運命』と、ウィーンもので共演を重ねている両者。今回もまたベートーヴェンがウエルザー＝メストに委ねられました。</p> <p>立ち止まらずに突き進む颯爽とした推進力。ウエルザー＝メストの『第九』は、現代の先端的なベートーヴェン解釈の標準といったところででしょう。緩むことなく前へ進む快活なテンポですが、オーケストラとホルンの美しい響きも寄与して、それがけって淡泊な表情になることはありません。その中で、攻め気味の第2楽章と、やや遅めで幻想的な第3楽章の対比は鮮やかです。</p> <p>第4楽章の男声独唱はウエルザー＝メストの音楽運びにやや付ききれないかもしれないかもしれませんが、二人とも柔らかな声質の持ち主で、古典派の音楽にふさわしいパフォーマンスを披露。女声陣もしっかりそれぞれ持ち味を發揮しています。</p> <p>しかしこの演奏で最も大きな成果を挙げているのは、オランダ放送合唱団でしょう。透明度の高い自然な発声で、発音も丁寧。高音も安定しています。この名門合唱団の近年の充実度を見せつけて、終演後にはひととき大きな拍手を受けていました。</p> <p>なお、楽譜はジョナサン・デル・マー校訂によるベレンライター社の新全集版（1996年）を使用し、新しい解釈については適宜取捨選択しながら用いています。</p> <p>【曲目】 ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン：交響曲第9番 二短調Op. 125『合唱』</p> <p>【演奏】 フランツ・ウエルザー＝メスト指揮 ロイヤル・コンセルトヘボウ管弦楽団 タマラ・ウイソソソ（ソプラノ）ジェニファー・ジョンストン（メゾ・ソプラノ）ルベルト・エルンスト（テノール）フランツ＝ヨーゼフ・ゼーリヒ（バス）オランダ放送合唱団</p> <p>【収録】 2019年12月25日 アムステルダム、コンセルトヘボウ（ライヴ） 【映像監督】 ディック・カイス ■約1時間10分</p> |

| 番組名                           | 放送日                   | 概要  | 曲目、出演者等   |
|-------------------------------|-----------------------|---|---|
| カラヤン&ベルリン・フィル『ベートーヴェン：第九』1968 | 20,20,23,23,31,31,0,0 | 50年経った現在も鮮度を失うことのない、帝王カラヤンの、荘厳ながら知的で端正な運びにあらためて脱帽。綺羅星のごときスター歌手が競う終楽章は圧巻。    | <p>生誕250周年のベートーヴェン・イヤーを締めくくるのにふさわしい、カラヤン&amp;ベルリン・フィルの『第九』です。20世紀のクラシック音楽界に君臨した「帝王」ヘルベルト・フォン・カラヤン（1908～1989）は、その生涯にベートーヴェンの交響曲全曲を4度録音し、2度の映像による全集も残しています。『第九』の自筆譜がユネスコの「世界の記憶」に登録されていると同様に、そのどれもが世界遺産級の金字塔。番組では、1960年代末から1970年代にかけて制作された、映像による第一期の交響曲全集から、交響曲第9番『合唱』をお届けします。</p> <p>カラヤンは1965年に映像制作会社「コスモテル」を設立して、映像による音楽作品制作の方法を模索しました。ポップスのマーケットでさえ、いわゆる「ミュージック・ビデオ」が盛んに作られるようになるのは1980年代からですから、その鋭い先見性にはあらためて驚かされます。彼が映像の力を実感したのは、1957年にベルリン・フィルとともに来日した際、NHKが中継した彼らのコンサート映像を、食い入るように見つめる日本のファンの姿だったといえます。</p> <p>番組の『第九』が収録されたのは1963年に落成したベルリン・フィルハーモニーホール。客席に聴衆のいるカットも挿入されていますが、多彩なカメラワークや通常のコンサートでは難しそうなライティングなどを考えても、ライブ収録ではなく、ほとんどはセッションで収録されたはず。カラヤンが求めたのは、単なるコンサートの記録ライブ映像ではなく、あくまでも映像による新たな音楽表現の可能性でした。カラヤン自身の指揮姿を中心に、個々の奏者を映すのではなく、彼らの奏する「楽器」にフォーカスして頻繁に入れ替わるカット割りからは、そんなカラヤンの挑戦が伝わってきます。面白いのは第2楽章で、トリオのあと、タ・カーボ（始めに戻る）した途端に映像がカラーからモノクロに変わります。回想シーンのような意味を込めているのでしょうか。</p> <p>カラヤンのアプローチは、あくまでも神々しく厳肅なベートーヴェンですが、テンポ設定などは19世紀的な仰々しい恣意的なアプローチではなく、知的でモダン。その鋭敏なセンスにはあらためて脱帽させられます。</p> <p>第4楽章の独唱陣は圧巻です。グンドウラ・ヤノヴィツ（ソプラノ）、クリスタル・ルトヴィヒ（メゾ・ソプラノ）、ジェス・トーマス（テノール）、ヴァルター・ペリー（バリトン）。ヴェテラン・ファンには懐かしい、カラヤンの重用した往年のスター歌手たちが綺羅星のごとく並んでいる様子だけでも壮観ですが、その歌声の素晴らしさ。声楽界はいつの世も百花繚乱ではありますが、この時期が黄金期のひとつだったのは間違いありません。</p> <p>合唱はベルリン・ドイツ・オペラ合唱団。撮影用だけかもしれませんが、舞台背面のボデイウム席から舞台左右の2階席まで180度にびつり配置された合唱団の姿には圧倒されます。</p> <p>【曲目】 ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン：交響曲第9番 二短調Op. 125『合唱』<br/> 【演奏】 ヘルベルト・フォン・カラヤン指揮 ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団 グンドウラ・ヤノヴィツ（ソプラノ）<br/> クリスタル・ルトヴィヒ（メゾ・ソプラノ） ジェス・トーマス（テノール） ヴァルター・ペリー（バリトン） ベルリン・ドイツ・オペラ合唱団（合唱指揮＝ヴァルター・ハーゲン＝グルロ）<br/> 【収録】 1968年 ベルリン、フィルハーモニーホール 【映像監督】 エルンスト・ヴィルト ■約1時間6分</p> |
| ティーレマン『微笑みの国』2019             | 1,1,3,3,11,11,14,14   | ティーレマン&シュターツカペレ・ドレスデン&名歌手たちによる豪華なジルヴェスター・コンサートから、レハールの傑作オペレッタの枠を超えた名ナンバーたち！ | <p>ドレスデンの大晦日といえばこれ！ 世界最古にして最高のオーケストラのひとつ、シュターツカペレ・ドレスデン（SKD）が本拠地の美しいゼンパー・オーパーで毎年開催し、世界中に中継されるジルヴェスター・コンサートです。音楽監督の巨匠ティーレマンは得意のワーグナー・オペラの反動か（？）、ここ数年、ウィーン・オペレッタを大いに好み、オペレッタ・ガラや『メリー・ウィドウ』ハイライトなどをこの公演で取り上げています。レハール生誕150年にあたる2019年は、『微笑みの国』ハイライトを披露しました。</p> <p>レハールが築いた「オペレッタ銀の時代」の後期、世情不安定な1929年に初演された『微笑みの国』は『メリー・ウィドウ』と並ぶ彼の傑作であり、従来のオペレッタのスタイルから大きく踏み出した意欲作です。ここでは西洋と中国の文化の差異、それによって引き裂かれる男女の愛の悲劇が描かれますが、そこはやはりオペレッタ。洒落たワルツやウィーンの歌、ミュージカル的なナンバーなども目白押し、色とりどりの賑やかさです。</p> <p>そんな充実作をティーレマン&amp;SKDは驚くほど豪放・重厚に、そして繊細・美麗に響かせ、さすが劇場における百戦錬磨のコピ。オケの前や間の花道を縦横に使って歌う、選り抜きの句の歌手たちと共に作品の魅力を全開に聴かせます。効果的な照明と自在なカメラワークも相まって観応え充分。</p> <p>ブッチャーを尊敬していたレハールですが、天性の抒情は聴く者の心を烈しく揺さぶり、『トウランドット』のような中国的な響きと合わせ、当公演の本作はあたたかもドイツ風ブッチャーニ。スー・ジョンが歌う有名な「君はわが心のすべて」の純真な情熱、リーザの切ないアリア「もう一度故郷が見たい」や、この主役たちのデュエット「2人でお茶を飲みながら」は聴きものです。対してミーとグスタフが歌う「私の恋と君の恋は」などは幸福感いっぱいミュージカルのような。こうしたナンバーの時にティーレマンが指揮台を降り、歌手をたてての微に入り細を穿つ指揮ぶりは実に印象に深く、終幕でスー・ジョンが歌う「心はどんなに辛くとも我々は微笑むだけ」という言葉は、静かに観るものの胸に沁みできます。</p> <p>【演目】 フランツ・レハール：オペレッタ『微笑みの国』ハイライト 序曲第1幕～イントロダクションとアントレ、気にしないでね、いつも微笑むだけ、2人でお茶を飲みながら、りんごの花で作った髪飾りを、第1幕フィナーレ 第2幕～前奏曲、黄色の礼服は、私たちの心の中に誰が愛を刻んだのか、青い塔のサロンでは、私の恋と君の恋は、君はわが心のすべて、もう一度故郷が見たい、中国の結婚式の行列、第2幕フィナーレ 第3幕～甘いおとぎ話、ツイク・ツイク・ツイク、小さな幸福の花は早く萎えてしまった、第3幕フィナーレ<br/> 【指揮】 クリティアン・ティーレマン 【管弦楽】 シュターツカペレ・ドレスデン 【合唱】 ドレスデン国立歌劇場合唱団（合唱指揮：ヴォルフラム・テツナー） 【出演】 ジェーン・アーチボルト（リーザ/ソプラノ） バヴォル・プレスリク（スー・ジョン/テノール） エレン・モーリー（ミー/ソプラノ） セバスティアン・コルヘップ（グスタフ/バリトン）<br/> 【収録】 2019年12月31日 ドレスデン、ゼンパー・オーパー 【映像監督】 アンディ・ゾマー ■約1時間27分</p>  |



| 番組名                              | 放送日                 | 概要  | 曲目、出演者等   |
|----------------------------------|---------------------|---|---|
| バレンボイム「ベートーヴェン：ピアノ三重奏曲」演奏会 Vol.1 | 5,5,8,8,24,24,27,27 | ベートーヴェン・イヤーに向けて現代の巨匠が気鋭の若手たちと取り組んだ珠玉のピアノ三重奏曲ツイクルス。大作曲家の希望と野心に満ちた「作品1」の3曲でスタート！  | <p>ベートーヴェンの生誕250年に向けて、ベルリンのピエール・ブーレーズ・ザールでは器楽・室内楽の4つの中心ジャンルに焦点を当てたベートーヴェン・ツイクルス企画しました。ピアノ・ソナタ、弦楽四重奏曲、ヴァイオリン・ソナタ、そしてピアノ三重奏曲。番組は2019年12月、249回目の誕生日に、ダニエル・バレンボイムが、二人の若手奏者とともに行ったピアノ三重奏曲のツイクルス、その第1夜の模様です。</p> <p>22歳になる直前にウィーンに進出したベートーヴェンが、その3年後に作曲家として初めて出版した「作品1」がピアノ三重奏曲第1～3番の3曲のセットです。ベートーヴェンの全創作の中でいえば中期の始まりに当たる時期。作曲家としての書法や個性を確立していく時期に軸となったのがこのジャンルでした。ピアノ三重奏曲の書法や変遷を追うことは、「大作曲家ベートーヴェン」が形作り作られていく過程を見ることでもあります。</p> <p>若い二人の真摯な演奏にいつそう生き生きとした生命を吹き込んでいるのは間違いなくバレンボイムのピアノです。一切の虚飾のないごく自然なタッチの巨匠の10本の指から繰り出される多彩な表情。その支えの上で、ヴァイオリンとチェロが自由に振る舞って、ピアノの名技性と2つの弦楽器の独立性を両立させたベートーヴェンのピアノ三重奏曲の新鮮さが十全に発揮されています。</p> <p>2夜にわたるツイクルスの第1夜は、ピアノ三重奏曲第1～3番と、第5番の4曲が演奏されました。</p> <p>前述のように、ピアノ三重奏曲第1～3番はベートーヴェンの「作品1」です。すでに人気ピアニストとして有名になっていたベートーヴェンが満を持してウィーン楽壇に問うた自信作。作曲家としての成功への希望と野心が込められています。その挑戦は一定以上の成果を収め、ベートーヴェンはこの予約出版でかなりの収入を得ることもできました。第1番は、ウィーンに出る直前にボンで書かれたと考えられており、3曲の中では確かにシンプルで穏やかな書法を示しています。一方で最後に完成したと考えられている第3番は、ベートーヴェンにとって象徴的な意味を持つ八短調の作品。師のハイドンが進歩的すぎて聴衆には理解できないので出版を見合わせるように忠告したというエピソードが伝えられているほどの、新しい音楽でした。この3曲を続けて聴くだけでも、すでにベートーヴェンの作風の変遷をまざまざと実感できるはず。</p> <p>ピアノ三重奏曲第5番は、それから10数年後、交響曲第5番『運命』や第6番『田園』、あるいはピアノ協奏曲第5番『皇帝』などと同じ時期、いわゆる「傑作の森」と呼ばれる創作の絶頂期に作曲された充実作。『幽霊』という愛称は第2楽章の神秘的な雰囲気由来しています。</p> <p>なお、『街の歌』の愛称のある第4番変ロ長調Op.11は、もともとピアノ、チェロとクラリネットのための三重奏曲だったものを、クラリネットをヴァイオリンに代えて編曲した作品です。このツイクルスではプログラムに組み込まれていませんでした。</p> <p>【曲目】 ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン：ピアノ三重奏曲第1番変ホ長調Op.1-1 ピアノ三重奏曲第3番八短調Op.1-3<br/>           ピアノ三重奏曲第2番ト長調Op.1-2 ピアノ三重奏曲第5番ニ長調『幽霊』Op.70-1<br/>           【演奏】 ダニエル・バレンボイム（ピアノ） マイケル・バレンボイム（ヴァイオリン） キアン・ソルターニ（チェロ）<br/>           【収録】 2019年12月1、4日 ベルリン、ピエール・ブーレーズ・ザール 【映像監督】 フレデリック・テレスク ■約2時間8分</p>  |
| バレンボイム「ベートーヴェン：ピアノ三重奏曲」演奏会 Vol.2 | 5,5,8,8,24,24,27,27 | ベートーヴェン・イヤー目前の2019年12月。バレンボイムが注目の若手奏者たちと披露したピアノ三重奏曲ツイクルス。名曲『大公』でフィナーレを飾る渾身の第2夜。 | <p>ベートーヴェンの生誕250年に向けて、ベルリンのピエール・ブーレーズ・ザールでは器楽・室内楽の4つの中心ジャンルに焦点を当てたベートーヴェン・ツイクルス企画しました。ピアノ・ソナタ、弦楽四重奏曲、ヴァイオリン・ソナタ、そしてピアノ三重奏曲。番組は2019年12月、249回目の誕生日に、ダニエル・バレンボイムが、二人の若手奏者とともに行ったピアノ三重奏曲のツイクルス、その第2夜の模様です。</p> <p>22歳になる直前にウィーンに進出したベートーヴェンが、その3年後に作曲家として初めて出版した「作品1」がピアノ三重奏曲第1～3番の3曲のセットです。ベートーヴェンの全創作の中でいえば中期の始まりに当たる時期。作曲家としての書法や個性を確立していく時期に軸となったのがこのジャンルでした。ピアノ三重奏曲の書法や変遷を追うことは、「大作曲家ベートーヴェン」が形作り作られていく過程を見ることでもあります。</p> <p>バレンボイムがこのプロジェクトに迎えたのは、自らの次男であるヴァイオリニストのマイケル・バレンボイムと、現在彼が積極的にバックアップしている注目のチェリスト、キアン・ソルターニです。二人ともバレンボイム率いるウエスト＝イースタン・ディヴァン管弦楽団の首席奏者を務めています。</p> <p>オーストリア生まれのイラン人チェリストのソルターニは公演当時27歳。2020年にはバレンボイムとシュターツカペレ・ベルリンが伴奏を務めるドヴォルザークの協奏曲をドイツ・グラモフォンからリリースするなど、世代を代表する奏者の一人です。映像で見る弾きっぷりからも、その豊かな音楽性や歌ごころが十分に伝わってきます。</p> <p>若い二人の真摯な演奏にいつそう生き生きとした生命を吹き込んでいるのは間違いなくバレンボイムのピアノです。一切の虚飾のないごく自然なタッチの巨匠の10本の指から繰り出される多彩な表情。その支えの上で、ヴァイオリンとチェロが自由に振る舞って、ピアノの名技性と2つの弦楽器の独立性を両立させたベートーヴェンのピアノ三重奏曲の新鮮さが十全に発揮されています。</p> <p>2夜にわたるツイクルスの第2夜は、ピアノ三重奏曲のための『私は仕立て屋カカドゥ』による変奏曲でスタートし、ピアノ三重奏曲第6番と第7番『大公』が演奏されました。</p> <p>『私は仕立て屋カカドゥ』による変奏曲は、ヴァイオリン・ソナタ第3番～第9番『クワイツェル』が続けざまに生まれた1802～03年ごろに作曲されたと考えられています。変奏主題の『私は仕立て屋カカドゥ』というのは、モラヴィア出身のオーストリアの作曲家ヴェンツェル・ミュラー（1767～1835）のジングシュピール『ブラハの姉妹』の中の歌。変奏の名手ベートーヴェンの面目躍如といえる多彩なバターンの10の変奏が繰り広げられます。</p> <p>ピアノ三重奏曲第6番は、1808年、交響曲第5番『運命』や第6番『田園』が書かれた「傑作の森」と呼ばれる絶頂期の作品で、第5番『幽霊』とともにOp.70として出版されました。</p> <p>そして、ベートーヴェンのピアノ三重奏曲の集大成である第7番『大公』は1811年に作曲されました。Op.1の3曲でこのジャンルの音楽の新たな可能性を示し、Op.70の2曲でそれを成熟させたベートーヴェンが、さらなる飛躍を遂げて完成した、音楽史上のすべてのピアノ三重奏曲の最高傑作です。</p> <p>【曲目】 ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン：ピアノ三重奏曲のための『私は仕立て屋カカドゥ』による変奏曲ト長調Op.121a ピアノ三重奏曲第6番変ホ長調Op.70-2 ピアノ三重奏曲第7番変ロ長調『大公』Op.97<br/>           【演奏】 ダニエル・バレンボイム（ピアノ） マイケル・バレンボイム（ヴァイオリン） キアン・ソルターニ（チェロ）<br/>           【収録】 2019年12月2、5日 ベルリン、ピエール・ブーレーズ・ザール 【映像監督】 フレデリック・テレスク ■約1時間32分</p> |

| 番組名  | 放送日                     | 概要  | 曲目、出演者等   |
|--|-------------------------|---|---|
| ザルツブルク音楽祭2020「グルーペンガー & パーカッシヴ・ブラネット・アンサンブル」 | 17,17,21,21,23,23,26,26 | 現代最高のパーカッショニストが20世紀の打楽器音楽の代表作3つを取り上げた注目公演！コロナ禍での開催を決断した創立100周年のザルツブルク音楽祭の貴重な記録。 | <p>パンデミックの困難な状況のなかで開催された2020年のザルツブルク音楽祭。地元ザルツブルク出身のスーパー・パーカッショニスト、マルティン・グルーペンガーが、自らの主宰する「ザ・パーカッシヴ・ブラネット・アンサンブル」を率いて、現代打楽器音楽の古典ともいえる3曲を演奏した公演の映像をお届けします。</p> <p>コンサートには「ビッグ・スリー」というタイトルが付けられました。多くの打楽器奏者がそうであるように、彼のために書かれた多くの作品を含め、おもに同時代の現代作曲家の作品をレパートリーに活動しているグルーペンガーですが、ここでは、ヴォルフガング・リーム（1952～）、ヤニス・クセナキス（1922～2001）、ステイヴ・ライヒ（1936～）という、現代音楽界の3人のレジェンダたちが、1970年代から1980年代にかけて作曲した、20世紀の打楽器作品の記念碑ともいえるべき作品を演奏しています。</p> <p>1曲目はヴォルフガング・リームの、6人の奏者のための『トウトゥグリヴィ（十字架）』。「新しい単純性」「新ロマン主義」の作曲家として分類されるリームですが、すでに400を超える作品を作曲している多作家で、その作風や書法をひとつに括ることは困難です。『トウトゥグリヴィ』は、20世紀前半のフランスの前衛詩人であり演劇人のアントナン・アルトールの同名の詩に触発された作品。アルトールの詩は、メキシコ先住民の居住地で体験した、彼らのベヨトル（ベヨーテ）の儀式に基づくものです。このリームの作品は、まず単独の打楽器アンサンブル作品として1981年に、その後、オーケストラと合唱、ナレーターを伴う1時間半を超える大規模な舞踏のための作品を構成する最後の部分として1982年に初演されています。ここで演奏されている、合唱（映像からははっきりしないものの、おそらくは録音によるPA再生）が入る版は、その全曲版のほうのスコアによるものです。</p> <p>2曲目は、ヤニス・クセナキスの代表作でもある『プレイアデス』。1979年に初演された6人の奏者のための作品です。「鍵盤」「金属」「皮（太鼓）」、そしてそれらの組み合わせという、打楽器を素材や構造で分けた4つの楽章で構成されています。ただし、各楽章をどのように並べるかは、演奏者の自由裁量です。珍しい楽器が使われているのが「金属」の楽章で、6人が叩いているのは「sixxen」という、この曲のために特別に作られた楽器です。6人の奏者の「six」と、クセナキスXenakisの最初の3文字「xen」を取って名付けられました。画面からは、木琴や鉄琴と同じように、ピアノの鍵盤状に金属柱が並べられているのがわかりますが、この19本の金属柱は、各片が不規則な音程になるように、また6台がユニゾンにならないように、つまり19本×6台＝114本の、微妙に異なるピッチの素材を使うことが要求されています。</p> <p>そして最後は、「繰り返し」が陶酔を生むミニマル・ミュージックの先駆者ステイヴ・ライヒが1971年に作曲した初期の代表作『ドラミング』です。反復のなかで、リズムのずれが生む不思議な効果。「ミニマルズムの最初の傑作」とも評される作品です。全体は4つのパートから構成されています。番組のテップには「Part One」と表示されていますが、実際には、第1部を中心に、全体を抜粋して再構成しているようです。女声と指定されている歌声（男性中心の）全員で、またぐわずかですが電氣的に変調した音声も加えるなど、自由なアプローチで作品を楽しんでいるのがグルーペンガーらしいところでしょう。この曲のみ総勢10人での演奏。なんとグルーペンガーの同名の父親（マルティン・グルーペンガー・シニア）も加わり、地元での父子共演に、演奏後は客席のヴォルテージも最高潮に達しています。</p> <p>考えてみると、ここで演奏されているのは、もう40～50年前の音楽。とかく難しく捉えて敬遠しがちな現代音楽ですが、ニコニコとじつに楽しそうに演奏する彼らの様子は、そんな食わず嫌いも払拭してくれるにちがありません。</p> <p>【演奏】マルティン・グルーペンガー（打楽器）ザ・パーカッシヴ・ブラネット・アンサンブル【マルティン・グルーペンガー・シニア、アーロン・グリンヴァルト、ダーフィット・ハートルモーザー、ユルゲン・ライトナー、リヒャルト・ブツ、グレゴール・レシュ、スラヴィク・スタホフ、ヴィヴィ・ヴァッシレワ、ヴァレンティン・フェツェル】</p> |
| プッシュ・トリオ「ドヴォルザーク：ピアノと弦楽のための室内楽曲全集」Vol.1      | 5,5,10,10,16,16,27,27   | イギリスの気鋭のアンサンブル、プッシュ・トリオによる、得意のドヴォルザーク・プロ。3曲のトリオで瑞々しく熱気に満ちた演奏を聴かせる。              | <p>2012年に結成されたプッシュ三重奏団は、ヴァイオリンのマティウ・ファン・ベレン、チェロのオリ・エプスタイン、ピアノのオムリ・エプスタインにより、ロンドンで結成されました。団体名は、20世紀前半に活躍した名ヴァイオリニスト、アドルフ・ブッシュの所有していたガダニーニの名器を使用していることから、その名を冠しました。かつてはそのアドルフ・ブッシュ自身もドルフ・ゼルキンとヘルマン・ブッシュと共に「プッシュ・トリオ」として名録音を残していますが、21世紀の若きトリオは結成直後からその名に恥じない高水準の演奏を実現し、世界的に活躍しています。</p> <p>彼らは2015年に「ドヴォルザーク：ピアノと弦楽のための室内楽曲全集」のCD録音を行い、熱気と情感あふれる好演をリリースしています。その好評もあり、2018年、同じ会場で同じゲストプレイヤーと共に、同じ演目のライブ映像収録を行いました。配置が珍しく、なんと3人お互いが向き合い、小空間で取り囲む聴衆に背を向ける形をとっています。</p> <p>ベルギーのエリザベート王妃音楽院のホールでの3公演のうち、初日はピアノ三重奏曲を3曲。演奏会は第1・4・3番の順番でしたが、映像は逆順の第3・4・1番です。ドヴォルザークとしては異例なほどの暗い情念に覆われた大作である第3番では、40歳を超えた作曲家の思いを汲んだ、美しく力強い熱演が繰り広げられます。「ドゥームキー」として知られる第4番は、全6楽章が組曲のように自由な音楽で構成される、かなりユニークな作品です。オムリの奏でるヤマハ製ピアノの美しい音色は特筆もので、特に第3楽章冒頭の静謐な感動はめったに味わえないもの。ノーブルなチェロ、情熱を前面に出すヴァイオリンとの絶妙なバランスも彼ら独特の味わいで、目まぐるしく変化する情景を楽しめる快演になりました。第1番は古典的な形式と朗らかな旋律が融合した佳品で、3人の丹念な演奏で味わえます。</p> <p>【演目】アントニン・ドヴォルザーク：ピアノ三重奏曲第3番へ短調op.65 ピアノ三重奏曲第4番ホ短調op.90「ドゥームキー」<br/>ピアノ三重奏曲第1番変ロ長調op.21</p> <p>【演奏】プッシュ・トリオ【マティウ・ファン・ベレン（ヴァイオリン）オリ・エプスタイン（チェロ）オムリ・エプスタイン（ピアノ）】</p> <p>【収録】2018年6月19日 ベルギー ワーテルロー（ウォータールー）、エリザベート王妃音楽院【映像監督】フレデリック・ドレク■約1時間51分</p>   |
| プッシュ・トリオ「ドヴォルザーク：ピアノと弦楽のための室内楽曲全集」Vol.2      | 5,5,10,10,16,16,27,27   | 気鋭のプッシュ・トリオと、俊英とベテランのゲスト2人による、最高水準のドヴォルザークを。2つのピアノ五重奏曲を最高の演奏で体験できる好機。           | <p>2012年に結成されたプッシュ三重奏団は、ヴァイオリンのマティウ・ファン・ベレン、チェロのオリ・エプスタイン、ピアノのオムリ・エプスタインにより、ロンドンで結成されました。団体名は、20世紀前半に活躍した名ヴァイオリニスト、アドルフ・ブッシュの所有していたガダニーニの名器を使用していることから、その名を冠しました。結成直後から高水準の演奏を実現し、世界的に活躍する俊英アンサンブルです。</p> <p>彼らは2015年に「ドヴォルザーク：ピアノと弦楽のための室内楽曲全集」のCD録音を行い、熱気と情感あふれる好演をリリースしています。その好評もあり、2018年、同じ会場で同じゲストプレイヤーと共に、同じ演目のライブ映像収録を行いました。</p> <p>エリザベート王妃音楽院ホールでの3公演の中日は、五重奏曲を中心に、ロシア出身の若きヴァイオリン奏者マリア・ミルシテインと、フランス出身でイザイ弦楽四重奏団のヴァイオラ奏者ミゲル・ダシルヴァが加わりました。配置は弦の4人がピアノの方を向いて円陣になるという珍しいもの。</p> <p>最初の「バガテル」はヴァイオリン2人、チェロ、ピアノという珍しい編成で演奏される、音楽の喜びあふれる小品組曲です。続く2つのイ長調のピアノ五重奏曲は、ベテランのヴァイオラが加わり、熱気と繊細さを兼ね備えた演奏になりました。第1番は31歳の年、作曲家としては初期の作品で、演奏機会の少ない佳品ですが、その貴重な好演が展開されます。第2番は46歳の年の作で、「ドヴォルザークのピアノ五重奏曲」といえばこの曲という人気作で、キャッチーな旋律美と庄厳の高揚感をもつ名曲中の名曲です。5人それぞれの個性と名技が発揮されながら、合奏の一体感も見事。第2楽章のピアノの美音とダ・シルヴァのヴァイオラの深い美音と歌心は特筆もの。第1楽章は雄大で完成度抜群、第3・4楽章のスピード感も楽しき満点。作品の魅力を存分に示した、見応え十分の名演です。</p> <p>【演目】アントニン・ドヴォルザーク：バガテルop.47 ピアノ五重奏曲第1番イ長調op.5 ピアノ五重奏曲第2番イ長調op.81</p> <p>【演奏】プッシュ・トリオ【マティウ・ファン・ベレン（ヴァイオリン）オリ・エプスタイン（チェロ）オムリ・エプスタイン（ピアノ）】ミゲル・ダ・シルヴァ（ヴァイオラ）マリア・ミルシテイン（ヴァイオリン）</p> <p>【収録】2018年6月21日 ベルギー ワーテルロー（ウォータールー）、エリザベート王妃音楽院【映像監督】フレデリック・ドレク■約1時間22分</p>  |

| 番組名   | 放送日                            | 概要  | 曲目、出演者等  |
|---|--------------------------------|---|--|
| <p>プッシュ・トリオドヴォルガーク：ピアノと弦楽のための室内楽曲全集 Vol.3</p>   | <p>5,5,10,10,16,16,27,27</p>   | <p>ヴェテランの域に達した円熟とみずみずしい情熱と。2019年のバリの春を彩った「ラフマニノフの週末」は、二人の俊英ピアニストを迎えての濃厚に薫る協奏曲の祭典！</p> | <p>2019年の春。ピアノ協奏曲を中心に、「ウィークエンド・ラフマニノフ」と題してバリーで開催されたラフマニノフ特集という注目プログラム。その第2日目の模様をお届けします。ロシア音楽界期待のスタニスラフ・コチャノフスキーがバリ管弦楽団を指揮し、1972年生まれのニコライ・ルガンスキー、1990年生まれのペゾド・アブドゥライモフという2世代の俊英をソリストに迎えた贅沢な協奏曲の祭典です。</p> <p>演奏されたのは、セルゲイ・ラフマニノフのピアノ協奏曲第1番、第2番と、『バガニーニの主題による狂詩曲』。</p> <p>まず登場するのは、モスクワ生まれで1994年のチャイコフスキー国際コンクール最高位（1位なしの2位）のニコライ・ルガンスキー。ラフマニノフは彼が最も高い評価を得ているレパートリーで、そのクールで正確無比なタッチから繰り出される、鋭い切れ味が、わたしたち聴き手の興奮を誘います。</p> <p>ピアノ協奏曲第1番は、モスクワ音楽院の卒業作品として書かれたラフマニノフの初期作品です。人気面では第2番や第3番に一步譲るかもしれませんが、現在演奏されているのは、初稿版が書かれてからおよそ四半世紀後に、作曲家としての地位を確立したラフマニノフによって大幅に改訂されたヴァージョンということもあり、若々しい楽想と成熟した書法が同居する充実作となっています。</p> <p>続いて、ラフマニノフの代名詞ともいえるピアノ協奏曲第2番で登場するのは、ウズベキスタン出身のペゾド・アブドゥライモフです。収録当時28歳の彼は、現在躍進中の注目株。ラフマニノフは、ゲルギエフとの共演盛も話題になっている得意のレパートリーです。ルガンスキーとは対照的に、ラフマニノフの濃厚なロマンティズムに素直に身を委ねるような情熱的な演奏スタイルに引き込まれます。</p> <p>交響曲第1番が酷評されたショックで長いスランプに苦しんでいたラフマニノフが、心理療法によって復調し、その復活ののろしとなったエピソードでも有名なピアノ協奏曲第2番。とうとうと流れる雄弁なメロディと、これでもかと連発する超絶技巧が聴く者を圧倒する20世紀の名曲です。</p> <p>そして再びルガンスキーが登場して、ラフマニノフ晩年の名曲『バガニーニの主題による狂詩曲』。有名な第18変奏はじめ、たった一つの主題による変奏から変幻自在の表情を生み出したラフマニノフの技巧に、何度聴いてもため息の出る傑作です。</p> <p>指揮者のスタニスラフ・コチャノフスキーは、1981年サンクトペテルブルク生まれのロシア期待の星。地元のミハイロフスキー劇場（マルイ劇場）でみっちり経験を積み、目下、オペラとコンサートの両輪で欧米の劇場・オーケストラから引っ張りだこの存在です。グスターボ・ドゥダメルと同年ですから、今後20年、30年と音楽界をリードしていきそうです。ここでの協奏曲のサポートでも、誇張のない、真摯で自然なアプローチの音楽作りが伝わってきて、今後目が離せない指揮者であることは間違いありません。</p> <p>【曲目】セルゲイ・ラフマニノフ：ピアノ協奏曲第1番変へ短調op.1 * ピアノ協奏曲第2番ハ短調op.18 * * 子守歌（アンコール、チャイコフスキー/ラフマニノフ編） * * バガニーニの主題による狂詩曲op.43 * 前奏曲嬰ハ短調op.3-2（アンコール） *<br/> 【ピアノ】ニコライ・ルガンスキー *、ペゾド・アブドゥライモフ * * 【指揮】スタニスラフ・コチャノフスキー 【管弦楽】バリ管弦楽団<br/> 【収録】2019年4月28日、フィルハーモニー・ド・パリ 【映像監督】イサベル・スラール ■ 約1時間42分</p>   |
| <p>ザルツブルク音楽祭2020「ドゥダメル&amp;ウィーン・フィル」キーンを迎えて</p> | <p>17,17,21,21,23,23,26,26</p> | <p>目下飛ぶ鳥を落とす勢いのライジング・スター、ドゥダメルが、ウィーン・フィルとの相性の良さをあらためて見せつけた『火の鳥』に大喝采！</p>              | <p>新型コロナウイルス感染症の流行のため、一時は開催が危ぶまれた創立100周年のザルツブルク音楽祭。予定より規模を縮小して8月1日から30日まで行われた音楽祭の最終盤、祝祭大劇場で行われたグスターボ・ドゥダメルとウィーン・フィルハーモニー管弦楽団のコンサート模様をお届けします。前半にエフゲニー・キーンを独奏に迎えてフ란ツ・リストのピアノ協奏曲第1番、後半がイーゴリ・ストラヴィンスキーの『火の鳥』というプログラム。聴衆同士の感染リスクを避けるために、休憩なしで行われた公演でした。</p> <p>歴史を辿れば、100年前も逆境のなかでのスタートでした。第一次世界大戦でのオーストリアの敗戦、そして戦争末期に世界を覆った「スペインかぜ」の脅威のなかで始まったザルツブルク音楽祭。はからずも再びパンデミックに見舞われたなかでの音楽祭開催には国内でも賛否両論があったはずですが、彼らの決断には、この音楽祭のDNAに潜在的に組み込まれているであろう、困難に立ち向かう勇気やしたたかさも感じます。準備期間中にスタッフ一人の感染が報じられましたが、それ以外に一人の感染者も出さなかったことは、感染防止対策という点で、ひとまずは大成功だったと言ってもよいでしょう。</p> <p>「スペインかぜ」は音楽界にもさまざまな影響を与えました。当然ながら音楽家のなかにもたくさん感染者が出ており、『火の鳥』の作曲者ストラヴィンスキーもその一人です。</p> <p>1918年、大戦とロシア革命の混乱で経済的な苦境にあったストラヴィンスキーは、奏者7人という小編成で演奏できる『兵士の物語』で各地を巡業して収入を得ようと目論んでいました。しかし初演後に自らが感染してしまい、また巡業の関係者も次々に感染したために計画は中止となってしまったのです。成功作である『火の鳥』の編成を縮小して1919年版組曲を作ったのも、そんな、金銭的にも人的にも疲弊したコロナ音楽壇の事情を鑑みて、どの楽団でも演奏しやすい版にすることで収入を得るためという説もあります。</p> <p>しかし2020年のコロナ禍のザルツブルクでドゥダメルとウィーン・フィルが演奏した『火の鳥』は、1910年初演の全曲版。このあと、11月の来日公演でも披露してくれたのと同様、堂々たる4管編成。演奏風景だけを見ればコロナ前の日常と変わりません。</p> <p>ドゥダメルが初めてウィーン・フィルを指揮したのは26歳のとき。2007年のルツェルン音楽祭でした。ザルツブルク音楽祭には、2008年のシモン・ボリバル・ユース・オーケストラの初出演を経て、翌2009年にウィーン・フィルとのコンビで再登場。ストラヴィンスキーの『春の祭典』を指揮しています。さらにその翌年にはウィーンでの定期演奏会を初指揮。以降、2014年の日本公演や、2017年のニューイヤー・コンサートなど、両者の蜜月ぶりは際立っています。</p> <p>デビュー当時の、シモン・ボリバルを指揮した演奏からは、切れのよいアグレッシブな指揮者という印象もあるかもしれませんが、ここで見るとドゥダメルの指揮は、とても丁寧かつ明瞭であることがわかります。パトーン・テクニックの面だけでなく、非常に見通しのよい設計で音楽を運んでいるのです。だからこそ、でしょう。ウィーン・フィルがじつに気持ちよさそうに弾いています。両者のコラボから、今後もしばらく目が離せません。</p> <p>一方、プログラム前半のキーンは貫禄十分。2021年には50歳を迎えるキーン。蠅突としたクールなテクニックに深みが加わった弾きっぷりで、鮮やかで劇的なリストを聴かせています。ソリスト・アンコールの『小犬のワルツ』も安定の軽やかさ。画面越しに思わず口笛を鳴らしたくなる快演です。</p> <p>【演奏】エフゲニー・キーン（ピアノ）グスターボ・ドゥダメル（指揮）ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団<br/> 【曲目】フ란ツ・リスト：ピアノ協奏曲第1番変ホ長調 プレデリック・ショパン：ワルツ 変ニ長調Op.64-1『小犬のワルツ』（ソリスト・アンコール）イーゴリ・ストラヴィンスキー：バレエ音楽『火の鳥』全曲<br/> 【収録】2020年8月27、28日、ザルツブルク祝祭大劇場、ザルツブルク音楽祭（映像監督）イサベル・スラール</p> |

| 番組名                              | 放送日                     | 概要   | 曲目、出演者等   |
|----------------------------------|-------------------------|--|---|
| ザルツブルク音楽祭2020「アラルコン & ヨンチェヴァ」    | 14,14,16,16,19,19,22,22 | 音楽の力が胸を熱くする、しなやかで強いヨンチェヴァの歌。コロナ禍のザルツブルク音楽祭で、時を超えて聴衆を虜にする、17世紀バロックからのメッセージ。 | <p>ソニア・ヨンチョヴァは、1981年12月25日ブルガリア生まれ。現在最もまばゆい輝きを放つソプラノ歌手の筆頭格です。ブラシド・ドミンゴ主宰の「オペリア」コンクールで優勝したのが2010年。2013年パリ・オペラ座の『ランメルモールのルチア』で注目を浴び、2014年にロンドンやウィーンで『ファウスト』のマルグリートを歌って大きな成功を収めて、その評価を世界的なものにしました。美しい声と舞台での類まれな存在感で、バロックからモーツァルト、ベルカント・オペラ、ヴェルディ、プッチーニまで広く活躍しています。</p> <p>この日、最も盛大な喝采を浴びていたのは、彼女の祖国ブルガリアの民謡「色あせた子羊」です。弦楽器のドローンだけのミニマムな伴奏の上で切々と歌われるのは、土俗的な信仰の神々の存在を感じさせるような哀愁を帯びた旋律。ひしひしと迫ってくる説得力のある歌に、画面の前で思わず居住まいを正してしまいます。ヨンチェヴァ自身も入り込んで歌っていたので、歌い終えると感極まって涙ぐんでしまいます。客席から、飛沫防止で禁止されているはずのブラヴォーが盛んに飛び出すのもやむを得ないかもしれません。</p> <p>歌の魂は20世紀にも脈々と受け継がれています。ペネズエラのシンガー、シモン・ディアスや、さらにはアンコールではABBAまで、400年を超えてつながる時空旅行をたっぷりお楽しみください。</p> <p>オーケストラは、アルゼンチン出身の古楽指揮者レオナルド・ガルシア・アラルコンが率いるカペラ・メディテラネア。ヨンチェヴァとは17年来的仲間というアラルコン。伴奏だけでなく、初期オペラの時代のリトルネッロと同じような役割で、歌と歌の間をじつにいきいきとした器楽合奏でつないで、コンサートを鮮やかに盛り上げています。</p> <p>指揮者アラルコンや編曲者ガートを紹介するヨンチェヴァの語り口やふるまいからは、二人への心からのリスペクトが感じられると同時に、彼女自身の誠実で飾らない人柄も伝わってきます。大劇場でヴェルディやプッチーニを演じてスポットライトを浴びるアリアドナとしての彼女とはまた別の魅力が垣間見えるようで、あらためて彼女の虜になるファンが続出しそうなコンサート映像です。</p> <p>〔演奏〕 ソニア・ヨンチェヴァ（ソプラノ） レオナルド・ガルシア・アラルコン（指揮、オルガン、チェンバロ） カペラ・メディテラネア</p> <p>〔曲目〕 アレッサンドロ・ストラデッラ：オトリオ『洗礼者聖ヨハネ』より～第2部娘（サロメ）の Aria「この涙とため息は」クラウディオ・モンテヴェルディ：『音楽の戯れ』より～おお、バラよ フランチェスコ・カヴァッリ：歌劇『セルセ』より～第2幕アデランテの Aria「Luci mie, che miraste」アントニオ・カルタラ：トリオ・ソナタ Op.2より～第12番チャコナ 変ロ長調 オーランド・ギボンズ（器楽編曲＝キート・ガート）：白銀の白鳥 クラウディオ・モンテヴェルディ：死んでしまいたい SV337 ルーカス・ルイス・デ・リバヤス：第一旋法によるハカラ【器楽バージョン】ホセ・マリノ（器楽編曲＝キート・ガート）：そのように私を軽蔑する目を ヘンリー・パーセル：歌劇『ディトとエネアス』Z.626より～第3幕ディトのレチタティヴと Aria「ペリンダ、あなたの手を／わたしがか地中に横たえられた時（デイドのラメント）」、合唱（器楽版）「力なく翼を垂れしキューピッドよ」ブルガリア民謡（編曲＝キート・ガート）：色あせた子羊 フランチェスコ・カヴァッリ：歌劇『エジスト』より～夜のシンフォニア クラウディオ・モンテヴェルディ：歌劇『ポッペアの戴冠』SV308より～第2幕アリナルタの Aria「横におなりなさいませ、ポッペア様～安らかにみな忘れ」サンチャゴ・デ・ムルシア／ディエゴ・フェルナンデス・デ・ウエテ：タランテラ ジョン・タウランド（器楽編曲＝キート・ガート）：さあ、もういちど愛が呼んでいる シモン・ディアス（器楽編曲＝キート・ガート）：忘却のバサーヘ 作者不詳（17世紀スペイン／編曲＝キート・ガート）：ハカラ「褒めそやす必要はない」（アンコール）</p> <p>ABBA（器楽編曲＝キート・ガート）：ライク・アン・エンジェル～夢うつろ～ レオナルド・ガルシア・アラルコン：歌劇『エル・プロメテオ』（アントニオ・ドラーク）より～第3幕ニルバの Aria「あなたとあなたに美しさに」ルーカス・ルイス・デ・リバヤス：第一旋法によるハカラ【器楽バージョン】〔収録〕2020年8月14日 ザルツブルク、モーツァルトのための劇場（旧祝祭小劇場）ザルツブルク音楽祭ライブ【映像監督】フェレンツ・ゼーテマン</p> |
| ザルツブルク音楽祭2020「メッツマッハー & コパチンスカヤ」 | 14,14,16,16,19,19,22,22 | 企画で独奏、指揮、編曲。そして「声」まで！ コロナ禍の2020年ザルツブルク音楽祭で強烈なオリジナル魅力を放った奇才コパチンスカヤの世界。      | <p>コンサート前半はジェルジ・リゲティ（1923～2006）のヴァイオリン協奏曲（1990／1992改訂）、コパチンスカヤが得意とするレパートリーで、2010年に来日した際に新日本フィルと弾いたのをご記憶の方も少なくないでしょう。スリリングな書きで一気に聴き通してしまう、エッジの効いた20世紀の名曲です。中世や民族歌謡の音楽素材も引用されているという音楽は、無調ですが旋律的で、オーケストラ奏者がオカリナやスライド・ホイッスルを吹く姿もユニークです。終楽章にはカデンツァが指定され、初演者のサミュエル・ガヴリロフや、英国の作曲家トーマス・アデスの書いたヴァージョンがあるのですが、コパチンスカヤが弾いているのはどうやら自作。なんと「声」まで使ったオリジナルティあふれるカデンツァです。そのカデンツァ終わりから曲尾まで、客席から思わず笑い声も起きる彼女のふるまいも痛快です。</p> <p>そしてコンサート後半は、彼女らしい才気があふれ出る、「コパチンスカヤ版」の『死と乙女』です。コパチンスカヤ自ら弦楽合奏用に編曲したシューベルトの弦楽四重奏曲第14番『死と乙女』を、楽章ごとに一度解体して、中世から現代のジェルジ・クルターグまで、「死」をテーマとする作品を挿入して再構成した、彼女のオリジナル企画。同じコンセプトのCDが2017年のグラミー賞を受賞しています（フランスAlphaレーベル。挿入曲が一部異なります）。</p> <p>原曲の第2楽章の前には、シューベルト自身が引用した自作の歌曲『死と乙女』を、コパチンスカヤが歌っています。前半の「乙女」の部分はシュプレヒシュテンメのように音程を外して、後半の「死」の部分で音をつけて歌い始める彼女。詩の最後の「私の腕の中で眠れ」のささやきには鳥肌が立ちます。</p> <p>第3楽章と第4楽章の間には、リゲティと同じハンガリーの作曲家（ルーマニア生まれ）のジェルジ・クルターグ（1926～）の作品が2曲挟まれています。『リガトゥーラ～フランス＝マリーへのメッセージ（答えのない質問への答え）』（1989）は、アメリカのチェロ奏者フランシス＝マリー・ウイッティのために書かれた作品。ウイッティは1970年代から弓を2本使う奏法に取り組んでおり、この曲もオリジナルは「二刀流」のチェロを用いた作品ですが、ここではチェロ2本とヴァイオリン2本（とチェレスタ）のヴァージョンで演奏されています。副題はもちろんアメリカの作曲家チャールズ・アイヴズの『答えのない質問』に関連していますが、アイヴスへの答えが、そしてウイッティへのメッセージが何であるかは聴き手の想像に委ねられているようで、クルターグは言葉では明かしていません。</p> <p>続く『カファ断章』（1986）は、ソプラノ独唱とヴァイオリン独奏という珍しい編成。作品全体は作家フランツ・カフカの日記や書翰の語句を歌詞に用いた全4部40曲からなりますが、ここでコパチンスカヤが選んでいるのは、曲名の「不安（Ruhelos）」の一語のみが歌詞の、わずか30秒の一曲。もちろんコパチンスカヤが一役二役で演奏しています。</p> <p>〔演奏〕 バトリツィア・コパチンスカヤ（ヴァイオリン、指揮） イング・メッツマッハー（指揮） ＊カメラータ・ザルツブルク</p> <p>〔曲目〕 ジェルジ・リゲティ：ヴァイオリン協奏曲＊アウグストゥス・ネルミガー（ミヒ・ヴィアンチ）編曲）：死の舞踏～『楽器で演奏するための演奏譜集』より ビザンティン聖歌 詩編第140番（バトリツィア・コパチンスカヤ編曲） フランツ・シューベルト（バトリツィア・コパチンスカヤ編曲）：弦楽四重奏曲第14番二短調『死と乙女』D.810第1楽章 フランツ・シューベルト（ミヒ・ヴィアンチ）編曲）：歌曲『死と乙女』Op.7-3 D.531 フランツ・シューベルト（バトリツィア・コパチンスカヤ編曲）：弦楽四重奏曲第14番二短調『死と乙女』D.810第2楽章 ジョン・タウランド：バヴァース「新たにした昔の涙」～『ラウレ、またはアツの涙』より フランツ・シューベルト（バトリツィア・コパチンスカヤ編曲）：弦楽四重奏曲第14番二短調『死と乙女』D.810第3楽章 ジェルジ・クルターグ：リガトゥーラ～フランス＝マリーへのメッセージ（答えのない質問への答え） Op.31b ジェルジ・クルターグ：不安～『カファ断章』Op.24より フランツ・シューベルト（バトリツィア・コパチンスカヤ編曲）：弦楽四重奏曲第14番二短調『死と乙女』D.810第4楽章</p> <p>〔収録〕2020年8月13日 ザルツブルク、モーツァルトのための劇場（旧祝祭小劇場）ザルツブルク音楽祭ライブ【映像監督】フェレンツ・ゼーテマン</p>        |

| 番組名                                 | 放送日                 | 概要   | 曲目、出演者等   |
|-------------------------------------|---------------------|--|---|
| ザルツブルク音楽祭2020「ネルソンス&ウィーン・フィル」       | 7,7,9,9,12,12,22,22 | 現在ウィーン・フィルが最も信頼を置く指揮者筆頭のネルソンスが、コロナ禍のザルツブルク祝祭劇場に詰めかけたファンと紡ぎ上げた、緊張感みなぎるマーラー『悲劇的』 | <p>記念すべき創立100周年を新型コロナウイルス流行の脅威のなかで迎えた2020年のザルツブルク音楽祭。番組では、アンドリス・ネルソンスがウィーン・フィルハーモニー管弦楽団を指揮したマーラーの交響曲第6番『悲劇的』のコンサート映像をお届けします。</p> <p>音楽祭のホスト役であるウィーン・フィル、ネルソンスとの最近の蜜月ぶりを見れば、100周年のパートナーとして彼が登場するのは必然のように思えます。ネルソンスとウィーン・フィルは、ベートーヴェン生誕250周年に合わせてドイツグラモフォンからベートーヴェンの交響曲全集をリリース。日本のレコード・アカデミー賞の大賞銅賞を獲得するなど高い評価を得ました。2020年のニューイヤークンサートを指揮したのもネルソンスです。ネルソンスは、現在ボストン交響楽団音楽監督とライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団のカベルマスターを兼任するラトヴィア出身の42歳。現代の指揮者界を牽引する第一グループの一人です。両者のマーラーは、2018年のザルツブルク音楽祭での第2番『復活』以来2度目の演奏でした。ちなみにネルソンスは、2015年のザルツブルク音楽祭でも、ボストン交響楽団と第6番を演奏しています。</p> <p>マーラーの交響曲第6番は1903年から1904年にかけて作曲され、1906年5月にドイツのエッセンで、マーラー自身の指揮により初演されました。『悲劇的』という副題は、翌1907年1月にマーラーが指揮したウィーン初演のプログラムに初めて掲載されています。マーラーの命名かどうかは不明ですが、自身が指揮した公演ですら、少なくとも承認はしていたのではないかと考えられています。しかしそれは、同時期に作曲した歌曲集『亡き子をしのぶ歌』とともに、マーラーの実人生の悲劇を暗示することになってしまいます。1897年に37歳でウィーン宮廷歌劇場の芸術監督に就任したマーラーは、1902年にアルマと結婚、すぐに長女マリア・アンナが、2年後には次女アンナが生まれ、公私ともに絶頂期を迎えていました。ところが1907年の夏に長女マリア・アンナが病気で夭折。自身も心臓病と診断され、さらには悪化していた宮廷歌劇場との関係が表面化し、秋には辞任を余儀なくされてしまうのです。第1楽章冒頭を「死の行進曲」とたとえたのはバーンスタインですが、聴き手はそこに、マーラー自身の暗い宿命を嗅ぎ取らざるを得ません。</p> <p>なお近年、この作品の第2楽章と第3楽章の演奏順について解釈が分かれており、国際マーラー協会では「第2楽章アンダンテ 第3楽章スケルツォ」という見解を支持していますが、ここでは初稿どおり、「第2楽章スケルツォ 第3楽章アンダンテ」の順で演奏しています。また、この曲の見どころである巨大なハンマーによる「運命の打撃」は、「(3回)ではなく」一般的な通例に沿って「2回」振り下ろされます。</p> <p>そのハンマーの使用による視覚的な演出効果などもある作品ですが、ネルソンスはけっしてそれをこげおど的に誇張したりせず、クールかつ丁寧に音楽をキープ。それでいてかたときも情感を失うことのない音楽作りで聴き手を魅了します。断末魔の叫びのような金管の最後の和音がティンパニの連打とともに消えて曲を結んだあとの長い静寂。客席も一体となった緊張感が伝わる、素敵なコンサート映像です。</p> <p>【演奏】 アンドリス・ネルソンス（指揮） ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団<br/> 【曲目】 グスタフ・マーラー：交響曲第6番イ短調『悲劇的』<br/> 【収録】 2020年8月7日、9日 ザルツブルク祝祭大劇場、ザルツブルク音楽祭ライブ【映像監督】 ウテ・フォイデル<br/> ■約1時間30分</p> |
| ゲルギエフ&ミュンヘン・フィル「ヴィニツカヤを迎えて」         | 2,2,4,4,7,10,10,15  | 2020年の新様式による、ゲルギエフとミュンヘン・フィルの演奏会。得意のソヴィエト作品で切れ味抜群の熟演を、そして『未完成』で重厚な名演を実現。       | <p>2020年の新型コロナウイルスの影響によるさまざまな制限のもとで行われた、ドイツの名門楽団ミュンヘン・フィルの7月公演。「新様式」と言うべきスタイルで、弦楽器も1人ずつ譜面台を使い、各人が距離を取り、管楽器はより大きく離れて配置。第1ヴァイオリン8人という小さな編成ですが、この配置で最高の演奏を届けると強い意志のもと、できる限り緻密なアンサンブルと、それでも音楽のスケールは小さくないという、楽団の伝統を感じさせる演奏を実現しました。</p> <p>指揮は、2015年から首席指揮者を務めるワレリー・ゲルギエフ。この日は普通の指揮棒をもち、得意のソヴィエトの2大作曲家の楽しい傑作を聴かせます。最初のプロコフィエフの古典交響曲は、守りに入ることなくハイテンション。特に第1楽章の大きなスケール、第4楽章の猛烈なスピード感が鮮烈で、小編成ならではのスリリングな演奏は圧巻です。続いて、ロシアの名ピアニスト、アンナ・ヴィニツカヤを迎えて、ショスタコーヴィチのピアノ協奏曲第1番、ピアノの超絶技巧と濃密な表現のすばらしさはもちろん、トランペット・ソロと弦楽合奏のオケとの絶妙な絡みで、シリアスからアイニー、抒情的な楽章から喜劇映画のようなフィナーレまで、作曲者の機知に富んだ楽曲の好演が繰り広げられます。しかし、公演最後の曲は意外にもシューベルトの『未完成』で、それまでの現代的なムードが一変。この楽団らしく響きは堂々としながらも、あくまで優く美しい『未完成』の名演で、人数制限された会場の聴衆もさまざまな思いを巡らせたことでしょう。ゲルギエフの古典的なレパートリーを体験する機会は、日本では残念ながら多くはありませんが、丁寧に真摯な指揮ぶりや表情、そして正統派な名演の実現に、この名指揮者の本領が見出されます。</p> <p>【演目】 セルゲイ・プロコフィエフ：交響曲第1番ニ長調Op.25『古典』ドミートリイ・ショスタコーヴィチ：ピアノ協奏曲第1番（ピアノとトランペット、弦楽合奏のための協奏曲）ハイドンOp.35 フランツ・ベター・シューベルト：交響曲第7番イ短調D.759『未完成』<br/> 【指揮】 ワレリー・ゲルギエフ【演奏】 ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団 アンナ・ヴィニツカヤ（ピアノ） グイド・ゼーガース（トランペット）<br/> 【収録】 2020年7月12日 ガスタイク フィルハーモニー（ミュンヘン）【映像監督】 ベネディクト・メロウ</p>  |
| ゲルギエフ&ミュンヘン・フィル2020「ベートーヴェン：交響曲第7番」 | 2,2,4,4,7,10,10,15  | 2020年の新様式で行われた、ゲルギエフとミュンヘン・フィル公演。彼の古典的な演目を観られる貴重な機会で、端正で格調高く、かつ愉悦あふれる演奏会を。     | <p>2020年の新型コロナウイルスの影響によるさまざまな制限のもとで行われた、ドイツの名門楽団ミュンヘン・フィルの9月公演。「新様式」による舞台配置で、弦楽器も1人ずつ譜面台を使い、各人が距離を取り、管楽器はより大きく離れています。この日は第1ヴァイオリン7人という小編成ですが、そうとは思えないくらい迫力ある響きで、さすがミュンヘン・フィルという重厚な演奏を実現しています。この配置でも音楽のスケールは大きく、最高の演奏という意志と、楽団の伝統が感じられます。</p> <p>この日に選ばれた演目は、ウィーンで活躍した3作曲家の名作。ゲルギエフが古典的な作品を振るのを観られる機会は稀少で、その意味でも貴重な記録なうえ、大曲のときたとは違う表情と細やかな実力をしっかり体験できる映像になっています。最初は、ウィーンで大人気を誇ったイタリアのロッシーニの『チエネレントラ』序曲。長年オペラ劇場のトップを張るゲルギエフだけに、種々ある端正な響きで、胸躍る愉悦も表現、オケの細かい技量も光る見事なロッシーニです。続いてミュンヘン・フィル首席ホルン奏者、チリ出身のマティアス・ピニエイラのソロで、モーツァルトのホルン協奏曲第4番を。楽々と美音を奏でるソロの名技はもちろんのこと、ゲルギエフのモーツァルトのすばらしさも特筆ものであり、音楽的で美しい聴きものとなっています。</p> <p>最後はベートーヴェンの交響曲第7番。リズムとエネルギーにあふれた名曲ですが、ゲルギエフはこの日は指揮棒を持たず、右手の震えるような動きを駆使して多くのメッセージを伝え、楽員は距離をもとめせず、熱く豊かな響きで熟演を作り上げます。思わずブラボーの声が飛んでしまったのも仕方ないと思わせる充実のパフォーマンスで、舞台のマエストロと楽員は充実感あふれる表情を見せます。</p> <p>【演目】 ジョアキーノ・ロッシーニ：歌劇『チエネレントラ』序曲 ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト：ホルン協奏曲第4番変ホ長調K.495<br/> ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン：交響曲第7番イ長調Op.92<br/> 【指揮】 ワレリー・ゲルギエフ【演奏】 ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団 マティアス・ピニエイラ（ホルン）<br/> 【収録】 2020年9月19日 ガスタイク フィルハーモニー（ミュンヘン）【映像監督】 ベネディクト・メロウ</p>   |

| 番組名                             | 放送日                     | 概要   | 曲目、出演者等   |
|---------------------------------|-------------------------|--|---|
| バーンスタインのブ람ス『ハイドンの主題による変奏曲』      | 14,14,16,16,19,19,22,22 | バーンスタインがウィーン・フィルと行ったブ람ス全集より。1870年当時ハイドン作とされていた楽曲を見たブ람スが、その曲のコラールのテーマを主題に用いた変奏曲。  | [演目]ヨハネス・ブ람ス：ハイドンの主題による変奏曲Op.56a[指揮]レナード・バーンスタイン[演奏]ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団[収録]1972年ムジークフェアインザール（ウィーン）[映像監督]ハンフリー・パートン<br>■約23分   |
| アーノンクルのバッハ『コーヒー・カンタータ』          | 17,17,21,21,23,23,26,26 | 20世紀の古楽運動の主導者としてクラシック音楽界に革命をもたらし、2016年3月に86歳で亡くなったニコラウス・アーノンクルと手兵「ウィーン・コンツェントゥス・ムジクス」が1982年に映像収録したJ・S・バッハ『コーヒー・カンタータ』。                       | 50代前半の若々しく精悍なアーノンクルの姿、長年の研究に裏打ちされた作曲家が意図したであろう演奏効果を試みる実験精神、そして当時の響きを単純に再現するのではないアーノンクル自身の徹底した美意識を、実際に目と耳で確認できる驚くべき貴重映像です。<br>「もしも我々がバッハの音楽に接することがなかったとしたら、我々は人間性を失ってしまうだろう」と語るアーノンクル。ジャネット・ベリー、ロベルト・ホル、ペーター・シュライアーによる素晴らしい歌唱は、観る者を至上の喜びに導いてくれます。<br>[演目]ヨハン・ゼバスティアン・バッハ：カンタータ第211番『お静かに、お喋りめさるな』（コーヒー・カンタータ）[指揮]ニコラウス・アーノンクル[演奏]ウィーン・コンツェントゥス・ムジクス、ジャネット・ベリー（ソプラノ）ペーター・シュライアー（テノール）ロベルト・ホル（バス）[収録]オクセンハウゼン修道院図書館[映像監督]クラウス・リンデマン[制作]1984年<br>■約30分                  |
| クーベリック&コンサートヘボウ『ベートーヴェン：交響曲第2番』 | 20,20,23,23,31,31,0,0   | 20世紀を彩る巨匠たちの貴重映像の数々。音だけではわからない、伝説のアーティストの動きや表情まで生き生きと映し出す。往年のファンには懐かしく、若いファンには新しい。懐古主義とは全く無縁の芸術体験。貴重な上にハイクオリティな記録として感動の映像体験を約束する。やはりテレビは面白い！ | 2014年に生誕100年を迎えた、20世紀を代表するチェコ出身の指揮者ラファエル・クーベリック50代の男性的な力強いベートーヴェン。何とんでもクーベリックが若い！映像がクリアになって、クーベリックの熱い指揮とその顔の表情を見ているだけでも価値がある。1960年代コンサートヘボウ管のサウンドも見どころ。団員一人一人の表情や楽器のクローズアップを映し出す、映像監督エーケ・ファルクの斬新なカメラワークも必見。最高にユークで面白いベートーヴェン交響曲映像だ。<br>[演目]ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン：交響曲第2番二長調Op.36[指揮]ラファエル・クーベリック[演奏]アムステルダム・コンセルトヘボウ管弦楽団[収録]1969年コンサートヘボウ（アムステルダム）[映像監督]エーケ・ファルク<br>■約36分   |
| クライバー&コンサートヘボウ『ベートーヴェン：交響曲第7番』  | 20,20,25,25,31,0,0,0    | カルロス・クライバーの指揮姿の中で最も有名な映像。生き生きとしたリズム、疾走するスピード感、美しい詩情、魔術的な休止、そしてフィナーレの圧倒的高揚！クライバーの魔法の指揮が視覚的に楽しめる。1983年10月オランダのアムステルダムで行われたコンサートヘボウ管との歴史的映像。    | [演目]ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン：交響曲第7番イ長調Op.92<br>[指揮]カルロス・クライバー[演奏]アムステルダム・コンセルトヘボウ管弦楽団<br>[収録]1983年10月19日&20日コンサートヘボウ（アムステルダム）[映像監督]ハンフリー・パートン<br>■約38分  |
| ツィメルマンのショパン『バラード第3番』            | 2,2,4,4,21,21,29,29     | コンクール優勝から12年後の1987年、ウィーンで収録されたショパン円熟期の傑作『バラード第3番』。技巧を前面に出すタイプではありませんが、確固たる音楽の構成感と音の粒立ちの美しさなど、若きツィメルマンのピアノズムが目と耳の両方で味わえます。                    | 第9回（1975年）ショパン国際ピアノ・コンクールで、史上初のポーランド人優勝、しかも史上最年少優勝が大きな話題を呼んだクリスティアン・ツィメルマンは、今や世界最高のピアニストの一人として、日本でも高い人気を誇る巨匠です。<br>ポーランドの詩人ミツェヴィッチの愛国的な詩からインスピレーションを受けたとされるショパンのバラードは、劇的でスケールが大きく、ショパン独特のリズムやピアニスティックな華やかさが魅力。第3番は、バラード4曲の中でも最も洗練され、優雅で典雅、豊かな情緒に満ちた名曲です。<br>なお、バラードは物語を意味するフランス語が起源。一般には物語詩などを指しますが、ロマン派以降は物語的・文学的な雰囲気のある音楽作品という意味合いを持つようになりました。<br>[演目]フレデリック・フランソワ・ショパン：バラード第3番変イ長調Op.47<br>[ピアノ]クリスティアン・ツィメルマン[収録]1987年2月ローゼンヒューゲル（ウィーン）[映像監督]ハンフリー・パートン<br>■約9分 |
| スカルラッティ：ソナタ集                    | 8,8,13,13,17,17,30,30   | ピアノの鬼才ボゴレリチ若き日のスカルラッティ映像。現代楽器を持つダイナミズムと古楽器の軽やかなソリリティを鮮やかな指捌きで表現した響きが斬新。  | [演目]ドメニコ・スカルラッティ：ソナタ 八長調K.487/ソナタ ホ長調K.20/ソナタ ホ長調K.98/ソナタ 短調K.450/ソナタ 二短調K.1/ソナタ 八長調K.159[ピアノ]イーヴォ・ボゴレリチ<br>[収録]1987年1月エッカルトザウ城（ニーダーエスターライヒ）[映像監督]ハンフリー・パートン<br>■約23分   |
| バーンスタインのガーシェウィン『ラプソディ・イン・ブルー』   | 14,14,16,16,19,19,22,22 | 冒頭のクラリネットのグリッサンドが印象的なガーシェウィンの最も有名な管弦楽曲。1976年ニューヨーク・フィルのヨーロッパツアーの映像では、バーンスタイン得意のピアノ弾き振りが見もの。  | 冒頭のクラリネットのグリッサンドが印象的なガーシェウィンの最も有名な管弦楽曲。ピアノソロが効果的に入るためピアノ協奏曲風な雰囲気もあり、ヨーロッパのクラシック音楽とアメリカのジャズを融合させたシンフォニック・ジャズとして高く評価された名曲です。<br>この番組は、1976年ニューヨーク・フィルハーモニックのヨーロッパツアーにおけるロンドンのロイヤル・アルバート・ホール公演での『ラプソディ・イン・ブルー』。バーンスタインが得意とするピアノの弾き振りと、バーンスタイン50代後半のカッコ良さが見どころ。<br>[演目]ジョージ・ガーシェウィン：ラプソディ・イン・ブルー[指揮&ピアノ]レナード・バーンスタイン[演奏]ニューヨーク・フィルハーモニック[収録]1976年ロイヤル・アルバート・ホール（ロンドン）[映像監督]デレク・ベイリー ■約20分   |

| 番組名                              | 放送日                  | 概要  | 曲目、出演者等  |
|----------------------------------|----------------------|---|--|
| スクリヤーピン：12の練習曲作品8より第2番／2つの詩曲作品32 | 1,1,3,3,6,6,12,12    | 1980年のショパン・コンクール事件（ポゴレリチの本選落選に激怒したアルゲリッチが「彼こそ天才」という言葉を残して審査員を辞任）で一躍脚光を浴びたイーヴォ・ポゴレリチ。この番組は、それから7年後の1987年にイタリア・パドヴァで収録された、ポゴレリチ28歳のスクリヤーピンです。 | 暗い部屋の中で黒衣のピアニストは幻想的な行末を見せ、その強靱なタッチと確かなテクニクを捉えた両手のアップ、不敵で凛々しい顔つきなど、若きポゴレリチの瑞々しいサウンドを巧みなカメラワークが演出します。<br>ロシアの作曲家アレクサンドル・スクリヤーピン（1872～1915）は、自身が卓越したピアニストであったことから、ピアノ曲を数多く作曲しました。ショパンの強い影響が見られるスクリヤーピン22～23歳の作品「12の練習曲」の第2番は、特有のポリリズム（複数の異なる拍子が同時に演奏される）が見どころ。1903年（31歳）の「2つの詩曲」は初期から中期へ移行する節目の時期にあたるスクリヤーピンの傑作の一つです。<br><br>[演目]アレクサンドル・スクリヤーピン：12の練習曲Op.8～第2番嬰へ長調／2つの詩曲Op.32（第1番嬰へ長調、第2番二長調）[ピアノ]イーヴォ・ポゴレリチ[収録]1987年8月パドヴァ（イタリア）[映像監督]ホラント・H・ホルフェルト<br>■約10分  |
| <b>バレエ</b>                       |                      |   |  |
| ネザールランド・ダンス・シアター『輝夜姫』            | 2,2,4,4,21,21,2,9,29 | 大家キリアンが創造する、静謐で深遠なおとぎ話。東洋と西洋の交錯の間に生まれた、新しい「かぐや姫」の世界。  | 日本人なら誰でも知っている「かぐや姫（輝夜姫）」の物語。美しく切ないこの昔ばなしは、今やヨーロッパ中で上演される有名バレエ作品になっているのをご存知でしょうか？1984年に交響組曲として石井眞木が作曲した『輝夜姫』が、振付家イリ・キリアンによって1988年、バレエ『輝夜姫』として再編され、彼が主宰するネザールランド・ダンス・シアターのために新たな命を与えられました。この番組は1993年12月に収録された映像。<br>バレエは、輝夜姫が成長してから月に帰ってしまうラストまでが描かれます。夜をイメージさせる暗い舞台には、揺れる小さなランプがたくさん吊り下げられ（星のよう）、大きな和太鼓の正面が照明に照らされています（月のよう）。和太鼓、西洋のパーカッション類、そして雅楽（日本を代表する名手たち！）による静謐で神秘的、どこかモダンでもある幻想的な調べの中に登場する輝夜姫。枯山水の白砂を思わせるような白いタイツに身をまとい、ゆったりとなめらか、しかし鋭角的で素早い動きが混じるダンスは、まさにこの世界の人ではなく月の人です。その幽玄さは能の舞台を観るよう。太鼓の乱打の中、村人や貴族たちの男による輝夜姫を取り合うダイナミックな戦いの対照的な振付にしても、舞台のレイアウトや照明の変化にしても、総じて直接的ではなく、抽象的な表現によって神秘的な雰囲気を感じていきます。<br>帝と心を通わせたがゆえの苦悩。そして、ついに月に戻っていく姫がセンターの大きな和太鼓の前で踊る姿は印象的。そこはかたく哀切が漂う、こうした静謐な舞台において、リズムの曖昧な日本の音楽と融合するキリアンの振付は実に「音楽的」であり、またそれを踊りこなすダンサー達の技量の高さに驚かされます。石井眞木の音楽は東洋から西洋へ、キリアンの振付によるダンスは西洋から東洋へと接近し、その交錯の間に生まれた類稀な舞台です。<br><br>[出演]フィオーナ・ルミス（輝夜姫） ポール・ライトフット（帝） マルティン・ミューラー、ケン・オソラ、ヨハン・インガー、パトリック・デルクロワ、グレン・エジャートン（求婚者たち） カリーヌ・ギゾ、プリギッテ・マルティン、リサ・ドレイク、スーザン・ララギー、カローラ・アルメンタ（村娘たち） ヨルマ・エロ、ブルース・ミケルソン（帝の騎士） ソル・レオン、ナンシー・ウーグリンク、コーラ・ボス・クルーゼ、フィリップ・バッキンガム、ロレイン・ブルーアン、ブルース・ミケルソン、ヨルマ・エロ、オーウェン・モンタギュー、イヴァン・ドゥブルイユ、ゼイン・ツッカー（貴族） [振付]イリ・キリアン [音楽]石井眞木；日本太鼓群と打楽器群のための交響的組曲『輝夜姫』Op.56 [装置&照明]ミハエル・シモン [衣裳]フェリアル・シモン [指揮]石井眞木 [演奏]近藤克次（日本太鼓） ミハエル・デーロー（パーカッション） サークル・パーカッション、八百谷啓（箏楽） 芝祐靖（龍笛） 角田眞美（龍笛） 宮田まゆみ（笙） [収録]1993年12月ネザールランド・ダンスシアター・ホール（ハーグ） [映像監督]ハンス・フルシャー ■全2幕：約1時間11分   |
| ローマ歌劇場バレエ2017『バラード／プルチネルラ』       | 8,8,13,13            | ピカソがデザインしたバレエ・リュスの名作が現代のボンベイに甦る！パリ・オペラ座バレエのエトワール、エレオノラ・アッパニャート率いるローマ歌劇場バレエの意欲的な野外公演。  | バレエ・リュス（ロシア・バレエ団）を率いた稀代の興行師にして鬼才プロデューサー、セルゲイ・ディアギレフがパリにあらゆるジャンルの天才たちを集め、新しいバレエの舞台を次々と生み出したのは20世紀初頭。このエポック・メイキングな時代から世に出た芸術家や作品は数知れず、それらは後世に絶大な影響を与えました。<br>この番組は、その時代に生まれた数ある名作の中から、パブロ・ピカソが衣裳とキュービズム風舞台デザインを手掛けた、エリック・サティの『バラード』とイーゴル・ストラヴィンスキーの『プルチネルラ』。上演はピカソのイタリア訪問100周年を記念したもので、レオニード・マシーンの振付を含めて初演時の舞台を再現しているのみならず、古代ローマ・ボンベイ遺跡の中の野外大劇場で行われたという、とても貴重なもの。パリ・オペラ座バレエのエトワール、エレオノラ・アッパニャートが芸術監督を務めるローマ歌劇場バレエのダンサーたちの、のびのびとした闊達な踊りが、初演当時の息吹を見事に伝えます。現代に復刻してもまったく古びないカラフルな感覚は必見！<br>『バラード』は、ジャン・コクトーの台本に、作曲家としての“変人”サティによるサイレンやタイプライターなどの日常音を交えたシニカルな音楽、さらにピカソがデザインした斬新な見世物小屋やコスチュームといった不思議な世界観の中で、これまた奇想天外な登場人物たち（馬も！）が、お客の呼び込みのためにバタバタと踊ります。ピカソの色彩とサティの奇抜な音楽、そしてダンスの予定なき調和の中からコミカルで軽やかな愉悅が溢れ出し、クリエティヴな息吹を伝えます。<br>『プルチネルラ』のピカソの舞台画は、月光が美しい夜のナポリの街と海。そこに流れるストラヴィンスキーの音楽の心わきたつ素晴らしい！この楽曲はディアギレフの提案で、17世紀の作曲家ベルレーズの音楽からセレクトしたものを「ロックの組曲風」に並べ、そこにストラヴィンスキーならではのモダンなオーケストレーションを施したものです。16～18世紀頃イタリアで流行ったコモディア・デラルテ風のバレエ作品に仕立てられています。爽快無比の音楽にのって、白地に赤の主人公プルチネルラはじめ、様々な色彩の登場人物たちが入れ替わり立ち替わり、飛んだり跳ねたり…ディズニー映画を見るような楽しい踊りの数々。そんな中で時に挿入される静かで憂鬱たただようシーンには心に沁みる美しさです。<br>[演目]バラード [振付]レオニード・マシーン [台本]ジャン・コクトー [音楽]エリック・サティ [装置&衣裳]パブロ・ピカソ [出演]マヌエル・バルッチーニ（中国の奇術師） サラ・ローロ、ミケーレ・サトリアーノ（アクロバット師） クリステアーナ・ミリアーノ（アメリカの少女） ジャコモ・カステッラーナ（フランス人マネージャー） ロイツ・ピロー（アメリカ人マネージャー） ルカ・ドッターヴィオ、ルイジ・コッラード（馬）<br>[演目]プルチネルラ [台本&振付]レオニード・マシーン [音楽]イーゴル・ストラヴィンスキー（ジョヴァンニ・バプティスタ・ベルレーズの音楽から） [装置&衣裳]パブロ・ピカソ [出演]クラウディオ・コチーノ（プルチネルラ） レベッカ・ピアンキ（ピンピネッラ） マリアーナ・スリアーノ（プルデンツァ） エレーナ・ビティニ（ロゼッタ） マルコ・マランジョ（魔術師） ジュゼッペ・デバロ（カビエロ） ジャコモ・ルーチ（フロリンド） マヌエル・ザッパコスタ（医者） マッシモ・ベルジーニ（タルタリッア） ルカ・ドッターヴィオ（バツボ） ジャコモ・カステッラーナ、ルイジ・コッラード、ジョヴァンニ・カステッリ、マッシミリアーノ・リッツォ（4人のプルチネルラ）<br>[出演]ローマ歌劇場バレエ団 [芸術監督]エレオノラ・アッパニャート [収録]2017年7月27日～29日ボンベイ大劇場 [映像監督]パオロ・サントニ<br>■約1時間5分 |